ば二人の若黨、一個の膳に差向うて夕飯の箸もろとも聲を潛めての物語、

「あの林平め、我等の手前も憚らず、頻りと近來お氣に入る體ぢやぞ」

「ごれほご一時の御意に叶うても、高が水呑百姓の當座下郎、只お國元に生れたといふだけで幸ひ江戸に野倒死の生命を拾ひあげられ、あの總身に智慧の廻り兼ねた六尺の大白痴が座興になる分の事ぢや、その外に何の取得のある奴か」

「いや、何の取得は無うても案外に運のある奴、内々そッと極樂の御伴までしたらしいぞ」

「そこが玩弄物に出來た奴、とるに足らねばこそ自然、お氣も許さるゝ筈ぢや、はゝはゝゝ」

「なれご彼奴、何となう我等を餘所にして、じたい蟲の好かぬ奴」

「好かずとも、まづ捨て置け、もし堪忍のならぬ時は叩き出すに面倒の無い奴、今い

ふ高が百姓の拾はれもの」

互に夕飯の箸とりながら、膳に向うて私語く折も、襖を隔てゝ耳を貫く一聲の悲鳴、ぎやッと叫ぶや否、忽ち組み付き跳ね返る俄の物音、

二人の若黨、はッと思はず箸を抛げ捨てゝ起たんとする一刹那、襖を蹴放ッて宙を飛び來る勘治平の五體、膳も茶碗も飯櫃も打ち碎いて眞ッ逆さまに落ち込みながら、

「しめたぞ小判一枚ッ」

みれば甚之丞、かくまでとは思ひの外の大力に腰骨を摑まれて、我を忘るゝ悲鳴もろとも流石は武道手練に林平を取ッて抛げは抛げたれご、其身も俄に起ち得ぬ體、滿面を皺めて苦しき大息の苦笑ひ、

「やァ無念、そゝ其奴に小判一枚してやられたぞッ」

二人の若黨、たゞ何事やら、きよろ〳〵と狼狽眼を配りつゝ其中間に立騒げば南無三

寶の勘治平、幸ひの味噌汁と醤油を面に浴びて化物の如く飯粒だらけの兩手を擴げながら、また同じ苦笑ひの滿面を皺めて這ひ出しぬ、

「此、この勝負、たしかに下郎め、お勝ち申した筈を、不意に取ッて拋げ出されましたは、お約束の外、恐れながら御褒美の小判、たゞ一枚だけでは」

「こりや林平、今のは腰骨ばかりで無いぞ、汝から不意に組み付いたればこそ、取ッて拋げたに、その上の褒美とは此奴、はゝゝゝ外面によらぬ慾の深い奴」

「いや、さう仰せられましても、最初お約束の勝負に勝ちました下郎、お聲さへかゝれば飛び退きまするに、たゞ跳ね返さうと遊ばしたが斯うなりまする原因、折角の小判一枚取逃してはと、おもはず一生懸命に、はゝゝゝそれは兎も角お腰の工合いかゞで御坐りまする」

甚之丞、人知れぬ腰骨の痛苦を片息に含みながら、わざと床柱に脊を持たせての大胡

坐、さあらぬ體いよ〳〵面に現はれて羅漢の泣き損ねたるが如し、

「お腰の工合いかゞとは林平、はゝゝゝまづ其方等の力が三四人、一時に來ての言葉ぢや、はゝゝゝ」

人知れぬ戀の通ひ路こそ天の賜物と思ひしが、その酒色の巷に一夜の大油斷を打ち漏らせしのみか、今また横へしまゝの五體を我手に委して、あらんかぎりの力を出して見よとは袋の鼠、おのれ只一摑み思ひの外、間一髪の早業に取ッて拋げ出されし勘治平、無念ながらも一時の座興に紛らして苦笑ひの體に打過しぬ、

されど六尺の大力が怨恨の一念に摑みし腰骨、あッと思はず我を忘れて必死の業に跳ね飛ばせしほどの苦痛、いかで其まゝに濟むべき、甚之丞また當座は只一時の苦笑ひに紛らしながら、次第に疼痛を覺えて動く毎に面を皺めつゝ針もて刺さるゝ心地、果

は起居の自由を失ひ厠へ行くさへ柱に縋り壁に倚り戸障子を傳うて、よろ〳〵と三才兒の如く歩み出す體、生命は無事に免れたれど、確乎に荒療治の效驗は見えて腰骨は揉み碎かれたり、

勘治平、おもはず物影に赤き舌を吐きつゝ音なき横手を拍ッて、我ためには重ね〴〵可惜ら大油斷を二度まで仕損じたれど、入らざる武藝自慢の馬鹿念を押して今あの容體となりし腰ぬけ奴、もはや半死半生の不具に等しき五體、芋虫を踏み潰すよりも易き業ながら、同じくば事の面倒なきところへ荷ぎ出して白晝、面と面とを突き合せし上、おもふ存分の眞正面を土足のまゝに蹴殺しくれんとの一念、顏色にも出さず、たゞ自己が過失の罪に身の置場も無き體、恐る〳〵甚之丞が枕許へ這ひ寄りぬ、

「其後の御氣分、いかゞ御坐りまする、たゞ當坐の御褒美を戴きたさに、つい前後を忘れました下種の白痴力、萬々かやうにならうとは存じませぬ筈が、さて思はず知

らず急所に當りましてか、今更ら申譯も無い次第、わけて新參の林平め、只管ら恐れ入りまする」

いはれて猶更ら我慢に募る甚之丞、さもなき體に頭を擡げながら、枕頭の煙草盆を引寄せて煙を輪に吹き出しぬ、

「高が鍬鋤の百姓力と思ひの外、や、人間の急所は格別、あの盲目の小按摩奴が大の武者男を手輕の指頭で揉み和らげる筈ぢや」

「その、その急所とも存じませず、うかと斯やうな事に」

「いや、たゞ一時の座興が過ぎた分の事、またこの疼痛も一時の疼痛で濟む筈、若輩の昔、武道修行の砌には年に七八度も氣を取失うて、いはゞ五體を散々に殺しぬいて來た身ぢや」

「さやうな御鍛錬あらせらるゝ上、第一また、さやうな御大量でこそ、この林平奴の

生命拾ひ、もし世間體なみ〳〵の御主人で御坐りますれば、たとひ一時の御座興にもせよ、百姓面の新參奉公、いかな御成敗になりますやら、せめての冥加に御介抱だけは一切、この林平に仰せ付けられまするやう、わけて願ひ上げまする」

もはや他に委さぬ勘治平、わけて願ひ上げし一手の介抱こそ、いよ〳〵甚之丞が身に取ッて俎上の魚なり、

荒療治の效驗たしかに見えて、半は腰ぬけとなりし甚之丞を猶も此上の念晴らしに出養生させて、おもふ存分の怨恨を報いくれんと、勘治平いよ〳〵自己が罪に身の置所さへ無き體、

甚之丞も最初のうちこそ人知れぬ苦痛を忍びながら、自己また然ほごとは思はず、第一は勘治平に對しての手前、あくまで强情我慢の角を立て通せしが、次第に疼痛の堪

へ難くなりしのみか果は身動きさへならざる苦しさに、おもはず我を折りて醫者を差招けば、南無三寶、腰骨の番を外して皮肉に突き入りたりとの事、

されご平生は藩中の諸士へ武道の大言を吐き散らせし男、今更ら百姓面の新參下郎に一場の座興より自慢の腰骨を痛められしとは得いはず、加之も斯くと聞きし後の勘治平は猶更の事、三度の食事に箸とる間さへ脇目も觸らで、夜の目も寢ずに枕頭へ附き纏うての介抱振、あるにもあられぬ後悔を涙もろとも頻りに出養生を勸めぬ、

されば とて甚之丞も今更の體、幸ひ其醫者が近ごろ構へしとやら、隅田川に臨みし橋場の寮を借り受けんとの約束、

重役へは風邪より重き大熱を發せしと屆け置いて、屋敷の門限を夜に入りし後、そッと勘治平の脊に負はれながら、用意の籠に運ばれ行きぬ、

かくなりし御病氣の源因は此林平、この御介抱を他手にかけて濟むべきか、まして醫

者の寮へ出養生なさるゝ上は猶更ら無用の人數と、あくまで二人の若黨を搔き退けて勘治平たゞ一人、夜道を駕に運ばれつゝ、腰骨は動かねぐ、此奴はや氣が轉じてか口は心のまゝの甚之丞、歩みながら附き添ふ勘治平に四邊かまはぬ笑ひ聲、

「林平、隅田川の流れに窓もる火影の橋場は小唄にも謠ふ江戸風流の水上ぢや、わけて橋場は情の山谷堀に近いぞ、山谷堀は戀路の土手八町に續くぞよ、はゝゝゝ」

「や、仰せられまする土手八町、その先が過般、お供を願ひましたところ」

「いかにも其、その大門口から不意に案外の介抱人、はゝゝゝ來まいとは偖いひきれぬ身ぢやぞ」

「は」

「もし來れば林平、醫者よりも手の屆く筈、まして其方に用なしぢや」

「は」

「當分、用の無いばかりか、いはゞ大切の腰骨を損じた奴、その介抱人に取ッては怨恨の深い敵ぢや、いかな目に逢ふも知れぬぞよ、はゝゝゝ」

勘治平、駕提灯の火に反いて黑闇に、人知れぬ大目玉を光らせながら、この腰ぬけ奴、何を吐すぞ、汝こそ怨恨の深い敵、いかな目に逢ふか今のうち、覺悟の念佛せよと冷笑ひぬ、

白晝さへ市街の甍を離れて往來の人影薄き橋場の寮に、はや淺草寺の露に濕りし鐘の音、ふけゆく秋の木枯に連れて窓を打つかと思はれ、闇を漕ぎ行く隅田川の櫓拍子は夢を誘うて枕頭に近けれぐ、何とやら寢られぬまゝの身に染む燈火の影、ぽッと壁にうつりて猶更ら物淋しき折しも、甚之丞が臥したる次の室より襖越の聲、

「大泉周左衞門、大泉周左衞門、只今それへ行くぞ」

甚之丞、はッと思はず鎌首を擡げて、腰骨の疼痛も打忘れながら、夜具の中より半身を這ひ出しつゝ耳を澄ませば、そのまゝ林平が鼾の聲、

さては心の迷ひか、腰骨こそ痛めたれ、氣に病むほどの病なき我、さては空耳か夜更けし枕にこそ臥したれ、いまだ夢にも入らざりし我、

されど正しく大泉周左衛門と一度ならず二度までも呼びし聲、加之も只今それへ行くぞと聞きし聲、

もし一念、怨靈ありとするも、既に死したる奴が何ほどの事あるべきと、行燈を引き寄せて燈火を搔き立て、枕頭の刀を近づけて四邊を見廻しながら、心を靜め氣を治めて猶も耳を澄ませば、またもや不思議に唸るが如き朧げの聲、

「甚之丞、甚之丞」

や、妖怪變化ならずば彼奴が怨靈、もはや我空耳でなしと、一刀の柄に手をかけて聲

せし方を睨むや否、忽ち襖に響く物音、おもはず夜具を跳ね退けて起たんとすれば、無念や腰骨に釘を打たるゝ心地、

をりしも隔ての襖を開けて、ぬッと這ひ込みしは勘治平、

「お召になりましたか」

「いや、呼ばぬが林平、この夜深の不意に起きたは今の物音でか」

「今の物音とは、その物音さらに聞えませぬが、たゞ夢うつゝに林平、林平と二三度の御召」

「むゝ異な事をいふ、たしかに其方の耳へ身が呼ンだと聞えたか」

「林平と呼ばれまするは、外に無い筈の林平」

「いかにも、かり受けた此二階座敷に主從たゞ二人の外、その他に其方の名を呼ぶものは無い筈、こりや林平、寢恍けたな確とせい」

いはれながら林平、ふと俄に訝かしげの顔色、坐したるまゝ首を伸べて眉を顰めつつ、甚之丞の背後を差覗きぬ、

「はて不思議、主從たゞ二人と仰せられまするが今、現在、今その背後に何ものやら、ぱッと人の立ッた影」

甚之丞、おもはず振向くや否、はや枕頭に仁王立の勘治平、もの凄き兩眼に冷かなる微笑を浮べて見下しぬ、

さらぬも心に何とやら今夜の不思議を抱きし甚之丞、まして呼ばざる不意に飛び起きて次の室より這ひ込みし林平が、猶更ら奇怪の言葉もろとも首を差伸べつゝ眉を顰めて我背後に人影ありとの一言、はッと思はず振返れば、はや枕頭に仁王立の林平、加之も俄に打ッて變りし顔色、

「甚之丞、しやッ面あげて見直せ、この林平を誰と思うて召使うた」

や、おのれと叫んで、枕頭の刀を取らんとするや否、忽ち二の腕を蹴られて無念や得物は飛ばされたれど元來の武者男、夜具跳ね退けて起き上らんとする腰骨の疼痛、またもや大力の踵に音高く蹴られて思はず仰ぎ轉びし面上へ、口に含みし勘治平が青啖、かッぷッと吐ッ掛けぬ、

「この腰ぬけ奴、叶はぬ五體を今更ら狼狽へて何とする、林平とは今日まで怨恨の涙を呑んで呼ばれた假の名ぢや」

甚之丞、せめての我腕と頼みし刀を跳ね飛ばされしのみか、たゞさへ堪へ難き苦痛の腰骨を折らるゝばかりに蹴られて、血走る兩眼に睨みあげつゝ齒を嚙み鳴らしぬ、

「たとひ、いかな仔細あるとも、よし文盲の下司下郎にせよ、かりにも一旦、主とせし恩義の身を」

「文盲の下郎でも人の道に目のある男、おのれこそ人間界に明盲目の鬼畜奴が恩義の主のと、はゝゝゝ黙れ、ほざくな、主とは世の中に大泉周左衛門といふ御人、たゞ一人を持ッたばかりの勘治平」

「や、周左衛門の」

「いかにも其、その手向草に汝の首を捻ぢ切らうため、わざと空恍けて此處まで落し込ンだ林平の手柄面を、あはれや芋蟲のやうに五體を轉がしたまゝ目ばかり動かして見る心持、何とぢや、今こそ始めて無念といふ事を知ッたか、心外といふ事を身に覺えたか、なれご汝が無念心外は汝が招いた自業自得、それよりも幾百倍、おもはぬ不意の憾みを抱いたまゝ塵塚の空長屋で腹十文字の最後を遂げられた人があるぞよ、加之も汝、鳥獣さへ自然の情といふものあるに、義理を生命の武士として親類縁者の血筋を引きながら、一門の本家たる其人を犬死の穴に欺し落した上、のめ

のめ今日まで滿足な生面を日に曝したのみか、記念の脇差を奪ひ取ッて身に帶びた腰骨、無事に立ッて動けてなるものか、この外道め、この盗賊め、ゆるゝ秋の夜長に捻ぢ殺してくれるぞ」

心は然なくとも日夜の身を粉にして、三月越の怨敵に追ひ使はれし勘治平、くわッと猶更ら一時に五臓六腑を絞り出す悲憤の面魂は夜叉に等しく、甚之丞が這ひ出さんとする脊骨胴骨腰骨首筋、おもふがまゝに四方より蹴立てゝ手鞠の如く轉ばしぬ、

をりしも響く曉の鐘、

「さァ鳴ッたぞ、汝がために現世の引導鐘」

淺草寺の曉の鐘、流れを隔てゝ白髭の森に立つ鴉の聲々、わけて川に沿ひて岸邊の軒は明け易く、はや戸の隙間より白く東天の射し入る頃、勘治平、のそりと二階の梯子

段を降り來りぬ、

階下には寮守の三人、耳遠き六十の爺は臺所口の一室、其子の若夫婦は入口の一室、間の板廊下を靜に歩みながら左右へ何氣なき聲、

「二階の家來、只今お屋敷へ急用でまゐる、お主人お目さめられるまで、手の鳴るまで、そッと戸障子あのまゝに賴みまするぞ、昨夜の夜深しで、ちと今朝は、寢過されるな筈ぢや」

耳遠き爺の應答なけれど、若夫婦が寢恍聲ながらの返答、確と聞きし勘治平おもはず首肯きつゝ、片手の小脇に丸き風呂敷の包物を抱へ、腰には平生の木刀ならぬ脇差の柄頭より鍔元まで古手拭に卷いて、高く裾を引き絞りし毛脛ぬッと現はし、四邊を見廻す兩眼ぎろりと光る體、何とやら常に變りて物凄し、

勝手口の戸締、音なく引き開けて立出で、また其まゝの後手に閉ぢながら見渡せば、

やう〳〵朝ぼらけの空のみ白く軒影また薄闇く、さらぬも淋しき市外れの橋場に往來の人は固より起き出でし家なく、門守る犬の聲まで睡たげに聞えぬ、

この寮に來てより五日目、暇さへあれば餘所ながらの他事に道筋を聞き、また自己が出る毎に眼を配ッて方角を覺えし勘治平、今戸には兼て事を賴みし橋の名を其まゝに伊達男あれど、わざと踵を轉じて眞崎稻荷の森影より田圃路に驅け出しぬ、

おもふところは四里四方の江戸市中に一人の的なし、たゞ神田小川町の高田左門が屋敷、その奥深く世を忍ぶ宥觀の許まで駈け込んで、おめ〳〵故郷の空へ立歸りし筈の勘治平が不意の進物二個の志節、

まだ露深き眞崎稻荷の森影を駈け拔けて、淺茅が原の昔に殘る草叢より畦道へ出でんとする折しも、いづこよりか一人の男、蝗の如く飛び出して狼狽へながら突き當れば六尺大力の勘治平、まして今は懸命の勢ひ、無言の片手に搔い摑んで拋げ出したるま

ま一散に駈け行く前途より、またもや宙を飛んで走せ來る六七人、はッと思はず身を避けんとすれご、たゞ一筋の田圃道、はや馳せ近づきし六七人、みれば聞き及ぶ八州捕方の風體、今この前路で三十前後の旅裝束した奴に出逢はぬかと問ひながら、じろじろ勘治平を打守る眼中、忽ち前後を取圍みぬ、

「今の奴よりも其方、いづこの何もの、ごこへ行く」

「は、橋場の寮に出養生の主人持、その下郎め、急用に麹町の屋敷まで、まゐります る」

「や、道筋も腰の物も違ふぞ、小脇の包物それ曲物ッ」

南無三寶、今しも不意に飛び出せし奴が我胸へ突き當りし時、おもはず解けて古手拭の端より現はるゝ金銀の柄頭、加之も生首の血汐いつしか風呂敷に染み出して、もはや叶はぬ絶體絶命の勘治平、前なる二人を田の中へ蹴飛ばせば、忽ち背後より頭上に

閃く十手の早業、稲妻の如し、

幼少より佛界の靈跡に育ちながら蛇蝎の如く一山の衆徒に追はれ、たま〳〵浮世に出でながら兄と頼みし其人を無念の最後に失ひしのみか、我も思はぬ獄囚に身を繋がれ、やう〳〵放たれて不思議の縁の情の宿に養はれながら門外一歩も叶はず身を忍ぶ現在の不運さ、まして十六の春秋を今日の曉まで人知れぬ心に泣いて暮せし生みの父に逢ひながら昔の夢に殘せし捨子の我身を思へば今その父が世に立つ全盛の手前、悲しや晴れて親子といはれぬ日蔭の境涯に、いとご過越方の堪へ難き悲觀、また行末の定めなき感慨、元來の氣も心も天晴れ世間を走せ廻る三十男に勝りし宥觀なれご、流石に何とやら夜更けし燈火に對ひつゝ壁にうつれる我影の薄き心地しぬ、

わけて免れぬ運命の事に當れば怖ろしき一轉の大根性、炎々たる猛火に等しき性質な

れご、靜に打沈みて我たゞ一人、じッと物おもふ時は無常迅速の佛界に育ちし身、一入さらに更け行く此頃の秋に誘はれて、窓うつ木枯の枕に通ふ曉、庭の草葉に集く蟲の音の夕、身は世を忍ぶ奥深き一室に閉ぢ籠りし宥觀、有るか無きか、默然として音なし、

誰が目にも十六の還俗小僧とは思はれね骨格、凡そ世間の二十歳にも越えて、眞白の顏面に飛び出でし大眼球、漆の刷毛もて描ける如き太眉毛、縫へるが如くに固く結びし一文字の脣端、山にある頃は若葉に等しく青々とせし坊主頭も、いつしか毛は伸びて寸隙もなく眞ッ黑に逆立つ體、美男ながらも一癖ごこやらに物凄き面魂を備へて、起居の振舞、言葉の端々、人に敷かれず物に押されず凛と跳ねたり、

まして父子こゝに始めて名乘り合ひし後は、母の胎内こそ由緒なき農家の産なれど、正しく自己は歴々たる武門の血を受けし氏素性を知りて、名さへ父の幼名を其まゝ飯

尾小太郎と改めつゝ、果は取る年と共に浮世の行末いかなる男を磨き出すやら、此頃の物淋しき憂きが中にも、をり〳〵軒端より朝夕の空を見上げて、おもはず我を忘る片頰に笑渦を浮べぬ、

主人の高田左門、また多年の隔意なき友垣に向うての義理よりも、絶えて久しき我弟の賴覺坊に思はぬ不思議の緣を繫ぎし情よりも、眼前こゝに忍ぶ宿なき其境涯の不運を憐れむ俠骨よりも、さらに人知れぬ内心の深き希望ありて、宥觀の小太郎を我子の如くに愛し、朝夕その坊主頭に毛の伸び行くを見て千金に換へ難き自己が娛樂とせる體、頻りに指折り數へて一日も早く結髮の男振を待ち受けぬ、

一日の夕暮、平常に無き主人の左門が廊下傳ひの急ぎ足、小太郎が一室に入り來りて聲を潛めながら眉に皺、

「今、飯尾殿に出逢うて、案外の事を聞き及んだぞ、あの故郷へ立歸ッた筈の勘治平

が今朝、召捕られて奉行所へ」

「や、何と仰せられまする」

「さて〳〵飯尾殿も、度々の苦しい目に逢はるゝ御人ぢや」

故郷の空へ立歸りし筈の勘治平が今朝の曉方この江戸の市外れで召捕られたりと、主人の高田左門より聞くや否、宥觀の小太郎おもはず目を見張ッて膝を進めぬ、

「何のため、いかな義で、その仔細お聞き遊ばされずか」

「加之も案外の沙汰、きけば主殺しの大罪ぢや」

「や、主殺し、主殺しとは」

「主殺しといふ、其主人に當る奴こそ、お身も我等も無念の齒を嚙む紀州家の怨敵あの甚之丞、さて〳〵下司には見上げた男ぞ、我等の手前は故郷へ歸ッた筈で内々そ

ッと敵の懷中へ下郎奉公に住み込み、三月越の寸隙を覘うた曉、いよ〳〵橋場の寮で、みごと首にしたとの事ぢや」

「やれ出來しました奴」

「なれど不運なもの、その首を抱いて眞崎稲荷の森影より裏傳ひの田圃路へ駈け出した折も折柄、ある曲者を追ひ來ッた捕方ごもに圍まれ、かはいや、其場に召捕られたとの事ぢや、また奉行所に引き出された時は、さらに一度の顏さへ知らぬ體に飯尾殿を見上げながら、以上の委細、具さに神妙に申し立てた上、たゞあの首に記念の脇差を添へて屆けたいところへ屆け得ざりしだけが殘念とて、六尺の大男が滿面の涙を浮べしとやら、今いふ通り、飯尾殿も度々の苦しい目に逢はるゝ御人、また思ひがけなき案外の勘治平を取調べて罪科に行はるゝ心中、いや氣の毒とも笑止とも、言葉に餘ッて察し申すぢや」

高田左門おもはず語る聲さへ潤めば、小太郎も思はず兩眼を閉ぢて泣きながら加之も我身に得難き賜物を拜受するが如き體、

「さては其、その首と敵の手にあッた記念の脇差を、この身への土産に持ち參る途中で」

「その優しき芳志といひ、知己の恩に酬いた一念といひ、天晴れして退けた手柄といひ、これが土氣より產れた文盲の百姓腹とは猶更ら以ての男振、可惜ら逸物ながら、さて三月越の間、かりにも下郎奉公に住み込ンだ以上は取も直さず表面の主と家來、その甚之丞を首にした勘治平、あはれや内心の忠も義も公邊の沙汰には通らぬとの事、わけて敵手は天下御三家の紀州家に歷々の武士一人、憫然なれど重き罪科を免れぬとの事ぢや」

「たとひ公邊の沙汰は通らずとも、元來が利慾非道のためで無いもの、まして現在奉

行が父の事」

「いや、其邊に手落のあるべき飯尾殿で無い、せめて敵手が半死半生のまゝ生き殘れば、結句これを僥倖に事の原因へ遡ッて、あくまで詮議を遂げた上、また工夫も分別も吟味の仕方もあれど、首にして退けた以上は却ッて叶はぬとの事、たゞ紀州家では新參奉公の下種下郎に寢首を搔かれた不覺ものゝ大泉甚之丞とて家名を取潰すかは知らず、勘治平は家來の身を以て正しく主を殺した大罪の外、致し方なしとの事、無念の最後を遂げた亡魂への手向草には天晴れ出來した業ながら、世の中の誰一人に唄はれもせず、さて〳〵惜しい男を汚れた木の空へあげるぞ」

大泉周左衞門は世に埋れ木の花も咲かで可惜ら二十八の曉を狗鼠に等しき小人原の術に謀られつゝ、加之も人知れぬ紀州家の空長星に無念の最後を遂げしのみか、また勘

治平は土氣の百姓腹に生れながら一朝の知己に感じて怨恨の敵を斃せし勇も義も世の中の誰一人に唄はれず、あはれや其まゝ主殺しの大罪に落ちて汚れの木の空へ梟けゝる運命の果、

おもへば山を出でて浮世に伴ひし三人のうち、わづか半年の間に二人まで斯る不運の終焉を遂げて、殘る宥觀、小太郎こゝに只一人、

その一人の宥觀また世を忍ぶ日蔭の身、高野一山の瞋恚執着は今なほ白金の別當へ手を伸ばして江戸市中を隈なく捜るのみか、一方には内々そッと寺門寺法の格式を時の權威に訴へて町奉行の放免沙汰を爭はむとする折柄、その奉行の飯尾豐後守は宥觀が生みの父なり、その身を忍ぶ宿は同じ高野山に睨まるゝ根來の賴覺房が肉身の兄なり、まして宥觀の力と賴みし大泉周左衛門は紀州家を追放せられしもの、その周左衛門の武士を斬ッて仇を報いしは宥觀と同志の勘治平、加之も紀州家と高野山とは猶更ら深

き緣ある舊來の間柄、かれこれ以上の仔細、もし一時に現はれし時は殆ご決河の勢ひ、いかなる案外の大事に立至るやら宥觀たゞ一人の身は一點の火種を幾重の紙に包めるが如し、

わけて人知れぬ心の苦しさは飯尾作左衛門、只その名の作左衛門ならば兎も角、身は豐後守として決斷所の黑白を預かる奉行の職にある上は、その宥觀を我子の小太郎とは言はれず、多年の友たる高田左門が許に祕し置くとは猶更ら以ての事、曾て大泉周左衛門が浪宅を訪ひし内々の情も、現在の今また主殺しの大罪として召捕りし勘治平の身に就いても、我たゞ一人の胸裡に深く包んで、動もすれば天下の三家たる紀州家の權勢と寺門別種の格式を備へし高野山を敵手に一期の安危を決せんとする心中、さらぬも夜更け人定まりし後の燈火に照らして、半白の鬢も俄に霜を增す苦心あり、加之も眼前の苦心は第一に勘治平の吟味、情に於ては我進退を賭けても一命を助けた

けれど、法に於ては迚も大罪の重科を免れぬ運命、工夫も分別も盡きて智慧にも力にも及ばぬのみか、油斷大敵うか〳〵すれば紀州家より如何なる不意の横車を押し來るやら、たとひ其横車を押し戻して當座の勝を得るとも、天下の三家たる勢威は末代まで天下の三家たる威勢、奉行の職は只これ我一代に得たる一時の職分、其職を失へば萬事こゝに休して父子朋友もろともに敵の餌食となるべし、あはれ願はくは苦しけれど我この職にあるうち、野山の執着も打ち消し紀州家の横車も出させず、四方八方を事なく一身に取纏めて後、昔の夢に殘せし我捨子の小太郎を天晴れ男に仕立てゝ白日青天の下に歩ませたしとの親心、

されば前後左右いづれにも免れぬ血路なき勘治平を、空しく鐵窓に繋いで生け置くは却ッて情にあらずと、眼を閉ぢ涙を呑んで頭上より浴せかけし大喝一聲、死罪を申し渡しぬ、

生きて不運の身は死しても不運、紀州の果に名も無き片山里に小田の蛙を友とせし水呑百姓が、花は櫻に人は武士といふ、その名物武士も大江戸には猶更心の花とも唄はるべき筈の男一念を立て拔きながら、あはれや世に埋木のまゝ朽ち果てし日蔭の恩を荷うて飛ぶ鳥落す權威の門に倚り添ふ仇を討ちしがため、徒らに主殺しの大罪となりて空しく現世の活地獄に繋がれつゝ、果は汚れの木の空に梟けられて萬人に死恥を曝す身の最後となりぬ、

勘治平、いよ〳〵死罪を申し渡されて、獄囚より露の生命を曳き出されし時、屠所の歩行の羊に似たるかと思ひの外、氏素性なき片田舍に生れし文盲の下種下郎なれど、一念かくと兼ての覺悟を極めたりけん、六尺の大兵肥滿さらに凋れたる體なく、悠々として大象の歩むが如く、加之も面に心地よげの微笑を浮べて左右の繩取に向ひながら

ら、神妙に慇懃の目禮、どこまでも優しき言葉に一入の哀れを催しぬ、

「いづれも様、御苦勞に存じまする、わけて此ほどより獄中の御介抱、偏に今生の御禮を申し上げまする、勘治平こと、國は南の果の名倉村といふ草叢に生れまして數にも足らぬ賤しき身が、この日本晴れの大江戸をも憚らず、かく大罪に處せられまする奴、嘸、さぞ骨まで腐りついた極悪人との思召も御坐りませうなれど、これには、こればかりは深い仔細あッて、利慾非道の盗賊でも無ければ血迷うて狼狽へた狂氣でも無い本性本氣の沙汰、男としては止むに止まれぬ一念の仕業、たとひ世の中の萬人に死恥は曝しましても、たゞ一人の恩人に報いました上は、もとより斯る大罪人となるを千萬覺悟の勘治平、せめて本心を失はざりし證據に、昔から今に至るまで幾百人の死罪、いかなる最後の體ありしかは存じませねど、こゝに勘治平といふ男一人、思ふ事を遂げし曉は世を恨まず身を歎かず六尺の五體に兎の毛の未

練も殘さぬ尋常の死際を御覽に入れまする」

およそ世の中に極悪非道のありたけを仕盡して天地に許されざる無頼兇暴の曲物さへ、いざ刑場の露に消え行く時は、今更ら眼中に女々しき未練の涙を含むか、自己の罪を忘れて人を恨み法を怨むか、はや半は死して顔色を失ひ腰を打ち拔かすか、但しは不敵の死物狂ひに無用の雜言を吐き散らすか、いづれにせよ人間平生の常態を取引して血迷ふべき中に名倉の勘治平、いはゞ言ふべき滿腹の不平を一言半句も漏らさず、誇れば誇り得べき全身の俠骨義膽を眉目の端にも現はさず、たゞ徒らに不義不忠の大罪を脊負ひながら加之も慇懃に禮を辨へ靜肅に身の運命を諦めつゝ、神色自若として曳かれ行く體に、鬼も欺く獄卒も多年の血に馴れし刑場の役人衆も思はず兩眼を瞬いて、いまだ死せざるうちより念佛唱名、南無と稱へて互に顔を反けぬ、

まして死罪を申し渡せし奉行の飯尾豐後守が人知れぬ心の苦痛、わけて高田左門が許

に腸を斷つ宥觀の小太郎、忍び音の男泣きに身を轉ばして打ち伏しぬ、

たゞさへ寂寞として月なき秋の夜、まして古來幾何の生命を斷ちし刑場の露に泣く蟲の音、ふけ渡る眞夜半の陰に閉ぢられて浮ばぬ怨靈の聲かと疑はれ、ちら〳〵と草葉に飛ぶ殘んの螢火は色青く闇に光りて亡魂の迷ふかと思はれ、梢より散り來る枯葉の音も無きに、いづこよりか血腥き風ぽッと吹き送りて、彼方の籔疊に夜を守る非人小屋の燒火も漏れず、たゞ物凄き星明りに宙を透して仰げば、朧げに見ゆる勘治平の獄門首一つ、

をりしも高田左門が腹心の家來、加之も武道の早業を得たる三人に萬一の過失を護られながら、せめて死首を我手の菩提に弔はんと、涙の露に袖を濡らして忍び來りし宥觀の小太郎、黑頭巾に頭を包んで腰に獄門臺の釘付を捻ぢ放すべき短刀を帶び足に柱を

攀ぢ登るべき用意の草鞋を穿ちつゝ、幼少より山の頂上に生ひ育ちて身は輕く、一山の衆徒に持て餘されて心は太く、附き從へる三人を押止めて自己たゞ一人、地を這ひ渡る猿に等しく身を屈めて刑場に入れば、はや我より先に何物とも知れぬ人影、彼方の闇に蠢いて忍び近づきぬ、

宥觀、はッと五體を丸めて額越の星明りに透せば、彼方の人影また我を怪しんで身を伏しぬ、

さても四里四方の江戸市中に誰一人、わざ〳〵自己が身の危きを忘れて此首一級を珠玉の如く覘ひ寄るものあるべしとは思はぬに、現在の今こゝに正しく我と同じき體は元來そも〳〵何者ぞ、もし夜警の非人小屋より我を捕へんとて忍び出でし奴ならば彼等三人の手に押へらるゝか但しは聲を相圖の約束、さりとて油斷大敵、その影いかに動くか見定めし上の事と、地に伏せしまゝ窺へば、彼方も其まゝ地に伏して動かず我

を窺ひぬ、

雙方より星明りに透し合うて、互の身を潜めつ、窺ひながら、ふと獄門臺を打仰げば、いづこよりか忍び寄りけん、また別に一人の影、する〳〵と傳ふが如く柱に攀ぢ上りて首に手をかけし體、

宥觀、今は堪らず、ぬッと身を起して飛鳥の勢ひに走せ寄らんとすれば、また彼方より俄に起ッて同じく走せ寄らんとする一刹那、はや既に首を奪うて地上に飛び降りし足音、そのまゝ闇に紛れて遁げ去りぬ、

十六の春まで育てられて其まゝ山に残せし明王院の師の坊はあれど、最勝會の相撲に力を添へられて其まゝ袂を分ちし根來の頼覺坊はあれど、この浮世に出でて生涯の行末を兄と頼みしは大泉周左衛門、されば其最後の無念を晴らすべきもの我のみと思ひ

しに、おもひきや、おめ〳〵故郷の空へ立歸りし筈の匹夫下郎が天晴れ物の見事に仇を報いし上は、その勘治平が獄門首を偷んで菩提を弔ふべきもの、いよ〳〵今は我た だ一人と思ひの外、また一人の我と同じく忍び入りしものあらんとは、

を出し拔いて外より其首を奪ひ去りしものあらんとは、

されど金銀珠玉の財寶にあらで、汚らはしき刑場の死首一つ、加之も主殺しといふ恐ろしき大罪の下に梟けられし獄門首一つ、萬人いづれも耳目を掩うて厭ふべき中に、わざ〳〵自己が身の危險を冒して闇夜これを偷まんとするもの、もとより利慾のためでなし盜賊の業でなし、有緣か無緣か、知るにせよ知らぬにせよ、深淺厚薄の差別こそあれ、必ず我と等しき心の涙、誰が手に落つるも同じ追善供養の種ながら、生れ故郷の空にさへ妻子眷族もなき獨身の勘治平、まして百里の山河を隔てし今この江戸市中、そも〳〵あの首を偷み取ッて菩提を弔はんとするもの、いづこの何物いかなる由

縁の人かと思へど、たゞ思ふのみの外、尋ね問ふべき的もなし、

かくと聞きし主人の高田左門、おもはず眉を顰めながら、わざと三日目の後、飯尾豊後守が屋敷を訪ひつゝ、わけて近來の間柄、奥深き閑室に聲を潜めて物語りぬ、

「さて〳〵人は苦に苦を重ねるもの、別して、このほどよりの御心勞、嘸やとお察し申す」

「や、何の因果でか、一度ならず二度までも、人知れぬ苦しい目に出逢ひまするぢや、なれど、身は奉行として法の公は致し方も無い事、是非なく涙を呑んで、あたら不愍の者を首に梟けましたぞ」

「いかにも不運な奴、奉公にさへ住み込まずば、世上に譽められて生き殘るべき工夫も道もあッたもの、空しく大罪の汚名を荷うて獄門首とは、然るに我等家來、きのふ他より歸ッての噂に其獄門首が紛失せしとやら」

「されば、いづこの何者が仕業か、たゞ一夜のうちに」

「はて、故國にも、この江戸には猶更ら以て獨身孤影の者と聞き及ぶに」

「いはれな高田殿、もしや萬一、お身の手では御坐らぬか」

「はゝゝゝ白狀いたす、實は小太郎殿に家來を添へて、但し折角お預り申した大切の子息を輕々しう粗末に致した義では御坐らぬ、いかに止めても、こればかりはとの一念」

「いや、さうあるべき筈、あの首あのまゝ梟けて置いて濟むべき身でない、實は一子のため餘所ながら、我等の手よりも内々、そッと人を遣はしたが、其奴の先に一人、また別に一人、はや首を奪うて飛び降りたものありとの事」

「や、其事、さては闇に睨み合うたは雙方の手で、其間に素早く首を取ッて飛び降りた別人が、そも〳〵正體の分らぬ不審もの」

「その不審もの、何に致せ、詮議に及ばずとも敵であらう筈なく、また後日いづれよりか必ず知れる筈の事、たゞこゝに一事、かねての覺悟ながら偖、あまりの急激で聊か手に餘ッた不意の義が出來ましたぞ」

いよ〳〵勘治平の獄門首は、高田左門の手で無く、飯尾豐後守の手で無く、また別の一人が偷み去りしに極まれど、いづれ敵にあらざる以上、その不審は詮議に及ばず後日の事として眼前こゝに急激の當惑ありと眉を顰めぬ、

「餘の義でも御坐らぬ、こりや兼て覺悟の上ながら、さて斯うも不意に手嚴しう來ようとは案外、實は高田殿、今朝、御老中より内々そッと我等を召されて、例の高野山一條」

「偖は佛徒にあるまじき我意を募ッて、はや其處まで手を伸ばしましたか」

「いかにも、一山の申分を聞けば、たとひ取るに足らざる只一人の新發意にせよ、當山に許し難き罪あッて江戸まで出奔したもの、江戸町奉行の手をかりて召捕りし上、それがために設けたる關東詰所の別當へ引渡さるゝが古來の定法、さるを擅の專斷に任して放免せしは取りも直さず當山を踏み付けたる致し方、その意を得ずとの次第で」

「ついては貴方の御返答、其場で何とせられた、また御老中の思召、如何やうで御坐ッた」

「それが高田殿、たゞ高野山より一應の訴願でなく、きけば紀州家より力を入れての口添もあるとやら」

「や、爲居ッたぞ、大泉周左衞門が事、また子息の事、勘治平の事まで一切、搦み合うての義で御坐るかな」

「いや〳〵、さうでも無い體、たゞ紀州家と高野山との間柄を幸ひ、果して我等が前前よりの見込み通り虎の威を戴いた野狐の振舞ぢや、なれど身に取ッては現在の大敵、御老中の言葉にも、相手が相手、あまり大事に立至らぬやう今のうち何とか工夫せよとの仰せながら、もとより覺悟の我こゝぞと心得、明神の壇上を汚せし惡戯より最勝會の相撲より、いち〳〵仔細に申し立てゝ後、いはゞ既に衆徒が存分の懲戒に逢うて事の濟みしのみか、第一は出奔せしもので無く、正しく白晝に山を下りて還俗せし上は、はや一山の沙汰を離れて町奉行の處分にあるべき筈、わけて不肖なれど天下御政道の一端に與かる飯尾豐後守、大切なる奉行の職分を僧侶の横車に曳き潰されても御差支これなきや、とまで思ひ切ッて論議いたしたものゝ、さて紀州家といふ大傘の下に雨を凌ぐ奴、また理よりも利に落ち易い當世の人情、此上に何時いかなる不意の迷惑を身に來すやら、思へば男一代の右左、生涯の浮沈こゝで

御坐る」

「やれ、いよ〳〵事となりましたな、但し飯尾殿、貴方の心體、つまりの心體いかにせらるゝ御所存か」

「我等、心では却ッて面白い敵手、また職分の上からは一歩も退かぬ心體、なれど高田殿、恐ろしや人は氣に引かるゝもの、事の原因は我子かと思へば、さて何とやら脊に重荷を負うた心地、無念や出足が遲う御坐るぞ」

いづれ斯くあるべき事とは覺悟しながら、あまりの急激に高田左門おもはず眉を顰むれば飯尾豐後守、なほも膝を進めて一期の浮沈この時にありとの體、

「寶永年間の町奉行に飯尾といへるもの、性質の骨が硬うて萬事呑込みの早い當世上役の口の齒に合はず、天下の三家たる紀州家と千年の靈跡たる高野一山を敵手に爲

過ぎて職を奪はれたりといはるれば本朝、身に取ッて生涯の味にも興にもなる事ながら、さて高田殿、今いふ通りの我等が心中、これが人にも得いはぬ我子のためかと思へば何とやら」

「いや、それ今更ら無用の會釋、あまりに遠慮過ぎた事、我等お預かり申す小太郎殿、たゞ高野山の新發意宥觀といふ無縁の他人としてからが、斯くあるべき筈の貴方、まして敵方の夢さら知らぬ事、そもく何を憚ッて誰に二の足を踏まるゝぞ、京都所司代の板倉は父の身を以て我子を職に勸めし凡例もある、これとは事こそ變れ、法の公と父子の私とは格別の義、縁と情のために職分を枉げぬ證據は涙を呑んで勘治平を獄門首に梟けられたほどの貴方では無いか、どこまでも、あくまでも天晴れ骨節の立てどころ、委細かまはず理を理として遣ッて退けられい」

「なれど相手が相手、その理の外へ跳ね出しかねまじい敵手、もし萬々一の事あらば

高田殿、猶この上あの一子の御介抱を頼みまするぞ、うまれて十六の今日まで親を知らざりし奴、たまく不思議の縁に逢ひながら偖また一日の親甲斐も無くて其まの日蔭に捨て置く奴、一入あはれに思ひまするぢや」

「や、心得た、實は望むところ、及ばずながら高田左門、確と心得ましたぞ、御存じの通り我等、何たる不運か、この年輩になるまで世に子寶といふものが無うて今年の春、やうく妻の生家方より養子を貰ひ受くべき約束せしほどの心淋しいもの、それに引換へて貴方は何たる幸福か家には世嗣の男子二人もある上、またあれほどの逸物を入らぬ捨子にして置かれたとは、もし春の約束さへなくば幸ひ今あの小太郎殿を無理にも乞ひ受けて我家に立てんもの、但し賜はらば御恩の頂上、其者とは同年ながら約束の前後、まづ弟分として」

「高田殿、母は名もなき賤しい胎内なれど血は正しく飯尾作左衛門の嫡々に生れたる

奴、もし思召に叶はゞ、否、あらためての御懇願、我手許へ引取ッては猶更ら不憫な奴、不出來ながら貰うて下さるか、勿論の事、いはずとも御前約の弟分として」

「や、何よりの事、偖この上もない生涯の賜物」

「きけば山を出る時、根來に在す御舍弟にも一方ならぬ御恩を蒙りしとやら、さるを今この江戸へ流れ來て我一子と知れし曉、また今日までの御介抱、こりや捨てる父と捨てらるゝ子よりも、遙に立勝ッた前世からの深い御縁、よく〳〵の事、なほ行末を只管ら頼みまするぞ」

「もはや頼まれずともの事、御念慮に及ばず差當ッての一分、ある敵手に對うて存分の働き振り」

「うかと科目の狂ひかけた飯尾豐後守、これで立ち直りましたぞ、はゝゝゝ天下の御三家どれほどの重量あるものか、あの高野一山を上盛として、はゝゝゝ」

世の諺に子寶といふ、わけて武門には男寶といふ、其一子さへなき高田左門やう〳〵今年の春に妻の生家方より養子の約束しながら、なほ何とやら心淋しき折しも、今こに多年の隔意なき飯尾作左衛門が一入の哀れを含む昔の捨子、また絶えて久しく逢はざる弟の頼覺坊より遙々と依頼の縁、さらぬも行末の希望をかけし宥觀の小太郎を我子として、おもはぬ浮世の旅路に名玉を拾ひ得し心地、實は人知れぬ内心に春の前約を悔いぬ、

されど飯尾作左衛門が町奉行の豐後守として、いはゞ一期の働き振、あの紀州家と高野一山を敵手の落着するまでは、宥觀の身に就いて戸の隙間より漏れ來る風にさへ心を配る折柄、一門一家の縁者は更なり現在の母たるべき我妻にも語らず、また兄弟たるべき養子方へも押祕して、たゞ其まゝに根來の我舍弟より頼み越せし還俗坊とぞ言

ひぬ、

その浮世に還俗の頭髪いよ〳〵伸びて、今は額越の我目にも立つ此頃、かくと聞いて何とやら心苦しく、うみの父と恩義の父と一時に持ちし心地、一夜そッと主人の高田左門に對うての物語、

「萬事、かやうな足らぬ勝の日蔭物を、さほどまでの思召、この身に取りましては思ひがけもない幸福の運拾ひ、あるまじき筈の御恩ながら、さて承れば今年の春、はや既に御縁邊より歴とした御養子の定まりし上に、また入らぬ厄介の流れ込みを今更、あまり勿體ない事、たゞ飯尾某が人にもいへぬ昔の捨子、やう〳〵こゝに成長いたした分で我身の相應かと心得まする」

「いや、この高田左門が子となるを不足と思はゞ兎も角、さもなくば、たとひ昔の捨子にせよ、正しく生みの父より改めて確乎に貰ひ受けたぞ、氣に入るまいが押付な

がらの父ぢや、はゝゝゝ但し貰はれても前約の養子あッて、同年の身を弟とせられ家の世嗣になれぬが」

「や、何として、身のほどを辨へず、左様な義を」

「さらば何がため、無用の辭退」

「は、うちあけて申し上げますれば、憚りながら、元來の子なきが故に他より乞ひ受けて、わざ〳〵折角の御養子に遊ばさるゝ以上、その御養子に對して、よし世嗣でなくとも弟分に致せ、もはや二人目の養ひ子は御遠慮なさるべき筈かと心得まする、また此頃の體、もはや身こゝにあるがため、やう〳〵十六年目に始めて逢ひましたる生みの父にも、その職分へ不意の迷惑をかけまする小太郎、なまなか此むづかしい浮世に還俗を遂げて心苦しい男にならうよりは、さて今のうち天晴れ白金の別當へ名乗り出て、高野一山の沙汰に任せたらばと存じまする、そも〳〵山を出で

て不思議の縁に伴ひし三人のうち、兄と頼みし周左衛門を不慮に失ひ、あの勘治平また案外の最後、あとに殘る一人、この後どれほどの男に、まして二歳の曉に捨てられし不運は十六の今日までも其まゝに附き纏うて遁れぬ不運、せめて父子對面せしを身の本望として、このまゝ潔く」

「いや、ならぬ、この高田左門が子に貰ひ受けずとも、飯尾殿の子として賴覺が兄として、ならぬ事、ならぬ事」

高田左門、俄に容をあらためて、ならぬとの一言に膝を進めながら、宥觀の小太郎が面じッと見詰めぬ、

「我に元來の子なきが故、わざ〳〵他より貰ひ受くべき養子の上に二人目の養子は入らぬ筈との事、また二歳の曉に捨てられし身が、たま〳〵十六年目の不思議に逢ひ

し生父の職分を煩はしては濟まぬとの事、それがため浮世を諦め還俗を止めて元の高野一山へ潔く名乘り出ようとの事、その覺悟といひ、その心體といひ、天晴れ思ひ切ッて男らしう物の念を殘さぬ言葉ながら、さて枝葉が茂り足らぬぞ、まだ分別が若葉の梢ぢや、ならぬ事、はゝゝゝ」

「いづれ不束なもの、その足らぬところ及ばぬところを」

「よく思うて見られい、さらぬも日夜に覘はるゝ事の原因の本佛尊、其お身が今更ら白金の別當へ名乘り出て我意に募ッた高野一山の沙汰に委せたらば、一旦これを放免した町奉行の飯尾豐後守が面、どこで立つぞ、また及ばずながら行末を思うて内内そッと今日まで手許に忍ばせた高田左門、何となるぞ、いや我等は兎も角、みごと元の野山へ其身を出して、さる代りに野山一體の衆徒より飯尾殿への謝罪狀を出させるまでの見込ばしあッてか、まして從來とは違ひ、天下の三家といはるゝ紀州

家の威勢を得手に帆かけて浮世の浪を眞一文字に漕ぎ寄せた敵手ぞ」

「は」

「また我等お身を申し受けるに就いては、たゞ自己が懇望の身勝手ばかりで無い理由、實は平生の骨肉に等しい飯尾殿の心中を察しての事、いはずとも元來お身は正しく父の血として飯尾家の嫡子ぢや、さるを若氣の昔、ふとした道に躓み迷うて言ひ兼ぬる事ながら家門の筋目には聊か不似合な母御の胎内に宿ッて捨てられた一子、それが十六年の今ふしぎの緣に逢うて父子對面の曉、諺にいふ人知れぬ世の隱し子は猶更ら親心の煩惱とやら、まして紛れもない長男、そのまゝ引取ッて家の世嗣に立てたきは山々、ありく〳〵と顏色に現はれても偖こゝが浮世ぢや、わけて心易い町家とは違ひ武門の格式、現在その後に正妻を迎へられて男子二人まで出生の今日、身の恥は兎も角、昔の草枕に產み落した捨子を今更ら不意の總領に迎へ取る義は祖先

への恐れ、かつは世間體の外聞、第一に輕からぬ役義を仰せ付けらるゝ飯尾豐後守としては、いかにも出來まじき事、かた〳〵以て猶更ら苦しまるゝ體ぢや」

「は」

「のみならず、よしまた昔の夢を打ち明けて家に引取らるゝとも、正しく嫡子總領の一子を現在の弟二人が陰に差置いて、なまなか後に迎へた正妻を母と呼ばする事、いよ〳〵父としては忍びぬ業、其いぢらしい目を朝夕に見るよりは却ッての幸ひ實子なき我等が許へ子として貰ひ受けし上は、前後の約束こそあれ、同じ他よりの養子と養子、たとひ家は嗣げずとも嫡子總領として現在の弟に取らるゝほどの不足もない筈、それと言はねど、こゝを思うて親心ぢや、また其邊を察しての貰ひ人ぢや、加之も時と場合、いかなる仔細あッて先約の養子に萬一、事の缺けた砌は、第二の養子が我家名の相續人、別に希望とあらば分家もさせ得る次第、さもなくば我等が

手許より天晴れ見立てゝ他の婿養子にも遣られる次第」

「や、勿體ない事」

「第一は今いふ紀州家と高野山を敵手に引受けて、ものゝ美事に一分を立て拔かるゝ筈の飯尾殿に心の重荷ないやう、この高田左門が貰ひ受けた養子ぢや、今日より飯尾の姓を更へて高田小太郎」

人知れぬ昔の草枕に生み落せし捨子の彼を、今あのまゝ我家に引き取れば現在の妻子が手前、其いぢらしき朝夕を見るに忍びず、また高野山を敵手に事の起因となりし彼を、今あのまゝ世間へ出せば紀州家といふ大車の附き添へる折柄、あはれ無慙の轍に曳き殺さるゝのみか、この飯尾豐後守が町奉行としての面を潰さるゝ道理、その一子の小太郎を幸ひの遣場、多年こゝに互の心を知り合うて隔意なき刎頸の高田

左門が子とせし上は、もはや我存分の世界、いづこの誰に何をか憚り何をか恐るべき、あくまで我職分と我骨節を立て貫いて事の用捨も物の會釋も入らぬ沙汰、さても面白し、あら心地よや千年の名蹟たる高野一山の今日どれほど不可思議の靈現あるか、天下の三家たる紀州家の威勢どれほど曲直顚倒の力量あるか、やう〳〵槍一筋の男が今年五十三の霜降る鬢髮にかけて後の手本に殘し置かんものとの一念、頑として大地に根を持つ磐石の如し、

加之も自然に通ふ大泉周左衞門が無念の手向草、涙を呑んで獄門首に梟けし勘治平へ餘所ながら運ぶ一片の回向、我子のためには行末の安穩、我身のためには武士冥利、世のためには横車を打碎く道理の鐵槌、おのれ見よやとばかりに大の兩眼くわッと開いて、まづ白金の別當へ一矢を放ちぬ、

先達吟味之砌、元高野山明王院新發智宥觀と申者の義に付、其後彼是の取沙汰有之候哉に聞及候處、當奉行所に於て取調の上、最早放免致候もの一切寺門の沙汰に不及事、此段爲念改而申入候也、以上、

滿足に其日々々の念佛すべき徒輩が何を狼狽へて入らざる事に立騷ぐぞ、今後この一札を坊主頭に張り付けて平伏せよといふが如き文言、びしやりと不意の眞正面より浴せかけられて、さらぬも時の權門を賴みし高野一山の詰所白金の別當、殊勝氣の念珠を拋げ捨て法衣の袖を卷き上げぬ、

いはゞ武門の大名高家に等しき眞言の大本山、加之も朝野千年の隨喜渴仰を保ち來り し格式の高野一山、わけて古來より國主地頭並の沙汰を行ひ來りし當山に對して、其時をり〳〵の地上に湧いて出る町奉行づれが何たる振舞ぞ、まして天下御三家への恐

れもあるべきに盲蛇の身知らず奴、をめ〳〵今この文言を見遁しては寺門衰退の基なりとて鼎の沸くが如き體、

飯尾豐後守、かくと聞いて、末世の賣僧ども誰に吼ゆるかと、冷かなる笑を浮べぬ、

一夜、飯尾豐後守が屋敷へ不意の客來は、太田下總守とて前の町奉行を勤めし身、今は老退隱居の氣樂さに只一僕を召連れたる杖つきの禿頭ながら、何とやら今夜の胸裡に重々しき仔細を持ち來りし體、

いはゞ主人のために師範分の前役、まして今年七十に近き老體、手を取らんばかりの慇懃に迎へて上座に押し直しつゝ、みづから茶菓を進むれば、太田老人いよ〳〵滿面の微笑を皺に埋めて、四方山の浮世談話も濟みし後、

「さて飯尾殿、この老爺め今夜わざ〳〵推參いたしたは、さぞ御迷惑の義ながら、せ

めて年甲斐に、ちと聞いて貰ひたき仔細あッての事」

「これは御老體の入らぬ御會釋、さる御用とあらば我等より伺はうもの、じたい如何やうの義で」

「いや〳〵御用の多い貴方へ暇に飽いた老樂の身として、來るが當然の事、まして聊か御無理を願はうとの事、さて葬式の御見送り下さるゝにも及ばず、また香奠も戴かぬ、その代りに今、この老爺の老耄れたところを御用捨に預かりたい、はゝゝゝゝ」

「こりや、あまりに御念の入り過ぎた仰せ、申さば我等、幸ひ美事に御手際の行屆いた跡目を受け嗣いで、兎も角も今日まで無事に人がましう御用を勤めまする者、世俗にいふ親分子分の間柄、さるを重ねて何の御會釋、たゞありのまゝ打ち明けて伺ひたい」

「其お言葉に堪へ情のない老人、うかと無遠慮に乗り出しまするぞ、さて飯尾殿、遠

耳ながら聞けば近來、お役目の義に就いて、紀州の高野山と御面倒な取合沙汰あるげの噂」

さては前役老功の手をかりて人知れぬ搦め手より押し來りしかと、飯尾豐後守、おもはず容を改めつゝ工夫の半眼に閉づれば、太田老人また既に鋒鋩を切り出せし體、老の膝を進めながら目鏡越に主人の面、じろりと見上げぬ、

「たゞ噂、風聞などと申しては、お氣にも觸らうが、うちあけたところ、實は老中方より賴まれて參ッた」

「や、さも御坐らう筈の事、いかやうに說き聞かせよ、申し聞かせよとの義で、夜分の御老體わざ〳〵御足勞を下されましたか、餘人の前とは格別、後輩未熟の豐後守、謹んで承りまする」

「腹藏なく申さば、強ち御老中方より内分の使者として推參いたしたばかりでも無い

事、この老爺も聊か、かくあられたいといふ心體のほどを添へての義、飯尾殿、萬事の角を丸めて聞かれたい」

「は、猶更ら身に取ッて有難き講學と心得まする、さて其思召まで添へられての義は」

「いかにも押付けての無體ながら、たゞ何となう、只今の奉行職を退かれたい、其まま上へ返上いたされたい」

我ためには前役の太田老人わざ〳〵訪ひ來て奉行職を辭退せよとの一言に、主人の飯尾豐後守、今更ら驚かぬ面體ながら流石に居座の膝を揉り直しぬ、

「仰せまでもなく、元來その職に堪へ兼ぬる不肖の我等、一日たりとも此まゝに罷り在るは上への恐れ、また下々への迷惑なれど、さて飯尾豐後守いかやうの越度あッて、かく承りまするか、自己の分際を辨へぬ愚鈍者、せめての念晴らしに委細の

義を」

「いや、その職に堪へぬ越度あッての義では御坐らぬ、實は飯尾殿、あまり職分に出來過ぎて鷄を割くに牛刀の比喩、元來の力が溢れての事」

「お言葉は兎も角、何は偖置き、事の起原は高野山よりの一條で、それがため御老中方の御内意を受けられ、また御自分の思召まで添へられて、この我等への仰せは、只今の職分を召上げられぬうち穏和に差上げよとの」

「いかにも、お馴染甲斐に無用の辭儀を省いて、其事、其事、實は老爺も元來、いづれかと言へば同じ奉行の前役を勤めたもの、過言ながら我世嗣に等しい後役の貴方へ何の如才あるべき、もし力とならば内々そッと隱居仕事に尻押も致したいが自然の情、一歩も退かせたくないが山々、なれど飯尾殿」

「高野山の外に、紀州家といふ大車ありとの御意でがな」

「その大車ぢや、まだ門外まで曳き出さぬが、もし曳き出せば飯尾殿、これ案外の地響き、なか〳〵一人二人の怪我人では濟まぬ事、されど理非曲直は誰も承知、承知なりやこそ老中方が内談の上、わざ〳〵この隱居老爺を召されて貴方の意を損ぜぬやう工夫せよとの依賴ぢや、依賴とあれば既に貴方の理は理で聞ゆべきところへ聞えた筈、たゞ一方に理外の大面倒あッての事、さる代り當の相手方あの高野一山へは此義に付いて以後一切、爪端も動かせぬは勿論の約束、定めて御不承ながら、この邊で老爺の面皮を立てゝ下さるまいか、ちと差出口なれど、そも〳〵事の原因を起した十六の新發智とやら、こりや必ず貴方の手で、いづれかへ隱し置かるゝ筈、さもなくて其、その爭ひの玉を市中に轉がしたまゝ此所まで手強く思ひ切ッて出られる貴方でも無く、はゝゝゝいかに立騷いでも、まだ世事に疎い案外の大家と塵外の長袖ども、そこに氣の付かぬうちが此方の花ぢや、はゝゝゝ」

「や、流石に御老體の御鑑定、其奴を相手に渡しては事の過ぎ去ッた座上の空論、その還俗小僧いかにも我等、この一條の落着するまで、さる所に忍ばせ置きまするが」

「偖そこぢや、その小僧を古來の寺法前例に依ッて返せといふが相手の申分、また町奉行の理に於て既に還俗したもの寺法の沙汰に返さぬといふが貴方の申分、つまり取るに足らざる小僧一人が出ると隱れるとで雙方の勝負となる事、いかに思はるゝぞ飯尾殿、まづ當の相手に勝ッた生證據として祕し置いた小僧を、思ふがまゝ市中に横行させれば貴方の一分こゝに立つ筈、せめて其事を潮合に何となく職を退かるるか、但し理外の大横車を眞正面に引き受けて萬一傷ついた上に職を召上げらるゝとも爭ひの小僧あくまで祕し終さうとの氣か、いづれにせよ不意の苦手を受けられた身の災難、さぞ心外お察し申すが、是また世上の無事を守る御奉公の一端ぢや」

小芋を洗ふが如き高野一山の坊主ども、いかに上を下へと立騒ぐにせよ、理に於て職を守る飯尾豐後守、また大風に灰を吹き散らすが如き紀州家の重役ども、いかに虎の威を振り廻すにせよ、事に當ッて骨節の立つ飯尾作左衞門、ならば手柄に押し潰して見よと思ひしが、案外おもはぬ不意の太田老人に一夜そッと搦め手を襲はれて、踏み占めし足裏の俄に痒き心地、

もし現はれたらば高田左門が一子小太郎と何處までも押し通す覺悟ながら、現はれざるうちは却ッて何とやら心に懸る宥觀、その小僧を昔の草枕に生み落せし我子とは知る筈なけれど、流石は同じ道に多年の老功、他の事は偖置いて目早く其處に眼を注ぎつゝ、必ず我手に祕せしものと見拔いての上、事の起因となり爭ひの的となりし其小僧その小僧といはるゝ毎に、ぐッと此胸の中央を刺さるゝ心地、加之も老中より賴まれし内意に其身の深き心體まで添へて、それとはなしに餘所ながらの芳志、當の相手

の高野坊主に生證據の理に勝ちし後、理外の大横車に無念の怪我なきうちに一歩を讓ッて職を退けとは、取も直さず事を無事に治めて我面皮も其間に立てんとの一言、これが道を辨へぬ餘人の口ならば知らず、いはゞ我ために師範分の前役の老體、

まして今更の事ながら我こゝに眼を閉ぢて、つらく過越方の昔を思へば、他國の空に尾羽うち枯らして人にもいへぬ旅路の戀に踏み迷ひつゝ、加之も生みし母なるものを產後の不介抱に殺せしのみか、生れし子を二歳の曉に捨てしまゝ生涯また顏見る事も叶はずと思ひの外、たまく不思議の緣に父子對面の本望は遂げながら、草を敷寢の浪々に入らざる無用の落胤とて現在の妻子が手前、そのまゝ家には引取れず、やうく昔の恥を打ち明けし友垣の下に淺ましき身を忍ばする哀れさ、されば捨てし昔も逢ひし今も同じ親甲斐の無き我、せめて草葉の蔭に迷ふ母なる女へ菩提のため、また親として子を捨てし現在の彼が心へ申譯のため、我さへ骨節の角を丸めて事なく職を退け

ば、高野一山より再び爪の端だも動かすまじとは幸ひの今この時、かほどの事で十六年目の親も立ち子も世に晴れて立たばと、今までは大地に根を持ち盤石の如き飯尾豐後守、俄に枯れし苧殻の如く折れて、たゞの浮世男となりつゝ太田老人の許を訪へば、皺くちやの滿面に微笑を浮べて禿頭を振り立てながら、やれ出來た、出來たゝと手拍子を打ちし後、天晴れ骨節の硬い町奉行と天下の三家たる紀州家と千年の名跡たる高野一山と三方の取合的となりしのみか、老中の頭を惱ませて此隱居阿爺まで引き摺り出した十六の冥加小僧、いかなる奴か見たいゝと喚き出しぬ、

高田左門が屋敷の奥まりたる一室に、そと忍び來りし飯尾豐後守と、人知れず呼ばれて入りし宥觀の小太郎と、聲を潛めながらも流石に潛まぬ父子の情は互の顏色に溢れ出しぬ、

「萬事は主人の高田殿も承知、今あらためて汝にいふ事ぢや、この父は昨日、仔細あッて町奉行の職を退いたぞ」

「や、あれほどまでに仰せられましたに、何として、如何やうの儀で」

「つまり父が職を退いたに就いて、當の相手の高野一山は以後、汝の影に指も差すまじとの約束、また紀州家の横車も其まゝ門内に曳き入れたからは、もはや日本晴の身ぢや、誰に憚らぬぞ」

「こりや案外、あまりの御損耗、小太郎の一身と、大切の御役目に可惜ら御氣性まで添へて、お交換へなされました儀で」

「さてゝ早い奴、そこに氣が付けば、事實それぢや、せめて汝が母への追善供養、また今日まで親甲斐の無い申譯に、我を折ッて」

「やれ勿體ない事」

「いや、わざ〳〵かうせずとも、つまりは理外の理由あッて同じ事の退職を見拔いたからぢや、そは偖置き、いふまでもなく汝は一旦、當家に貰はれた養子、今後の姓は高田ぞ、但し名は父の幼名そのまゝの小太郎、なれど生父の家にも引き取られぬ不運、義理父の世嗣にも立てぬ不運、雙方いづれに身を置いても免れぬ不運の代價といふでは無いが以後、我方より年々二百石づつの扶持米また當家より百石づつの賄料、あはせて三百石の男一貫ぢや、加之も仕官奉公の主持で無い身すがらの一本立、これで今日まで情なく餘所に見た我をも許せよ、亡母がためにも回向不斷の石碑を建てゝ思ふがまゝの孝行せよ、第一は行末どこまでも當家の恩を忘れず天晴れ世に出て男となれ、わけて萬事に油斷なく、種は種ながら流石に捨子生育の日蔭ものといはるゝな、父の恥、汝が恥、別して氏素性なき母が恥ぢやぞ」

おもはず兩眼に涙を含んで、四邊を憚りつゝ聲を曇らせば、小太郎、猶更ら身に餘る父が情を浴びて顏も得あげず、まして亡母の事かくまで思ひ給ふかと胸も張り裂く心地、そのまゝ其處に打ち伏しぬ、

「小太郎は兎も角、さぞ、嘸や草葉の蔭より、母が、喜び居りませうかと」

「むゝ、父子かうしたところを、見せいで殘念ぢや」

土手三番町の角屋敷、前の町奉行太田下總守、今は七十に近き禿頭の隱居老爺ながら音に聞えし活氣の老體、訪ひ來し飯尾豐後守を相手に大聲の高笑ひ、から〳〵と奥の小座敷より漏れぬ、

「やれ、わざ〳〵改まッて、さやうの御挨拶は入らぬ事、貴方ほどの御人が八幡あれまで思ひ詰めた折角の儀を、この老爺の年甲斐に免じて惜しげもなう、潔く捨てられた御禮、此方よりこそ申すべき筈、また身に取ッては梅干に昔の花が咲いた心地

ぢや、はゝゝゝ」

「いや、今更ら思へば自己が身のほど知らぬ我武者の無分別、幸ひ御教訓に依ッて飯尾作左衛門、案外の怪我も無う無事に濟みましたる次第、わけて雙方より爭ひの的となッた還俗坊、此奴いかばかりの幸福か」

「それ〳〵、その小僧、その還俗坊、いづれに祕し置かれたか、もはや事の落着いた

した今日、好奇心ながら一度、この老爺が見たいものぢや、始め貴方が老中方へ召されて論議せられた砌、その新發智が高野明神の壇上を汚したといふ大惡戯から最勝會の相撲に及ぶまでの委細、具さに申されたとの事、この老爺また實は老中方より傳へ聞いて猶更ら其小僧、ふしぎに面白く考へた折柄、是非とも一度、見せて下さるまいか」

「實は御老體、その還俗坊、お禮のため召連れて、只今お玄關の脇に控へさせ居りま

する」

「や、そりや一段の事、すぐ此所へ、そのまゝ此所へ參るやう」

氣輕の老人、みづから手を鳴らして人を呼びつゝ、それ案内せよと命じながら、また飯尾豐後守に對うての談笑、絶えず打ち解けて老の膝を進めぬ、

「飯尾殿、その小僧、じたい何者の子息で御坐るな、何、捨子、むゝ親知らずの捨子とか、はて生れながらに運命の平凡ならぬ奴、召捕ッて吟味取調の節は、いかな體で罷り居りました」

「まづ十六の小僧にはあるまじき體、いはゞ不似合に面憎いほど言葉も膽魂も押据ッた奴で」

をりしも案内に導かれし中腰のまゝ、靜に差俯いて入り來りし宥觀の小太郎、新に高田左門が紋所の羽織袴を着けて、一寸ばかり生え伸びし眞ッ黑の還俗頭、恐る〳〵一

室の閾際に摺り付けながら、偖どこやらに自然の凛とせし體、いかにも今年十六の小僧には出來過ぎて面憎し、

待ち受けし太田老人、大の眼鏡を鼻頭に掛けて膝を向け直しつゝ、じッと打守りぬ、

「はゝァ、これか、なるほど一目ちらと見ただけでも、やれ男振ぢや」

太田老人、老の鼻頭に小皺を寄せながら、膝を向け直し首を差出しつゝ、大の眼鏡越に宥觀の小太郎が面體、じッと打守りぬ、

「や、聞き及ンだ珍事出來の還俗坊、なるほど平凡ならぬ骨相ぢや、武家ならば自然と天晴の逸物になるべき男振、ことし十六とは見えぬぞ、飯尾殿、これが親知らずの捨子とは猶更ら惜しいもの、もはや事の濟ンで身に面倒のない以上、どこへ振賣にしても諺にいふ赤裸百貫の價値は確實な品、我等このまゝ買ひ受けても宜しい

ぞ、はゝゝゝ」

飯尾豐後守、おもはず苦笑ひの體、

「さて〳〵冥加な奴、こりや、こゝに在せらるゝは我等がために師範の先役を勤められし御老體ぢや、また此度の儀に就いても餘所ながらの思召を下された方ぢや、あらためて御挨拶を申し上げい」

小太郎、垂れし一寸伸びの還俗頭を靜に擡げて、恐る〳〵額越に見上げながら例の兩眼ぎろりと光りぬ、

「二歳の時には親より捨てられ、また十六の今日は我身で捨てましたほどの不運もの、それが斯くなりましたる御禮、いかに申し上げて宜しいやら、たゞ夢のやうに心得まする」

太田老人、膝を打ッて首肯きぬ、

「自然と言葉の端まで面白う出來た奴ぢや、これを此まゝ浮世に追ひ放つは猶更ら以て惜しいぞ、飯尾殿、今いふ通り我等、老の道樂として買ひ受け申さうか、何、先口がある、や、誰、高田、小川町の、むゝ、あの高田左門が」

「實は高田左門、年來の友と致して心易う打ち解けまする間柄、ちらと聞き及ぶや否、もし無事に落着した曉は是非に申し受けたいとの約束、本人また思はぬ幸福と存じて、御覽ぜよ、はや羽織の紋所まで」

「いかさま、これや我等の手後れぢや、はゝゝゝなれど飯尾殿、他の先約を阻むではないが、この還俗坊、あの高田左門の手に置いては互のため、行末の妙で無いらしいぞ」

「や、何と仰せらるゝ」

「不肖ながら七十餘年來の今日まで、浮世さまぐ、人いろくの事に當ッて加之も

人事一切の表裏内外、かずくの骨相を生死の境より見極めて、自然と學び得た目に今この還俗坊を觀れば、こりや當の主人が養ふべきものでない、いはゞ我等のやうに禿頭となッた世間無用の老物が、まづ隱居仕事の道樂半分に育てゝこそ無事の逸物、さもなくば事ぢや、事ぢや、其家と其人に事なうて濟むべき筈の男で無い、あの額口、あの脣端、鼻梁の工合、第一は眼中の瞳、のそりとした中に飛ぶが如き面魂、や、近う來て見い、筮竹算木は持たねど、この老爺、其方のためにも行末の鑑定してくれるぞ」

太田老人、澁紙を揉みぬいたる如き顏面に眼鏡越の瞳を光らせつゝ、ちかくと老の膝を摺り寄せて宥觀の小太郎の面體骨相、じッと打守りぬ、

「大道の賣卜者では無いぞ、また徒然の好奇心に學んだ業でも無いぞ、飯尾殿の手前、

ちと大口に過ぎた事ながら、我等そも〳〵多年の御奉公中かぎりなき幾何の人を生死の境と黑白の間に取扱うて來た自然の觀相ぢや、第一は他事ならぬ汝が行末のため、今この老爺の一言一句を身に沁めて聞けよ」

小太郎、恐る〳〵無言のまゝに謹んで拜伏しながら、さらに振上げし天生の面魂どこに一點の打たるゝ體なく、また眼前に何物ありとも覺えぬ體、

「や、これぢや、こゝぢや、いかにも生れながらの物に動ぜぬ不敵さ、事に驚かぬ大膽さ、こりや教へられたでも無く習うたでも無く元來この者の性、わけて當意卽妙の才氣を含んだ眼中、もし歷々の筋目ある武家武門ならば、天晴れ男として音にも聞え名にも立つべきに、惜しや何物の種か氏素性の得知れぬ捨子とは、行末の浮世に却ッて身の禍災を來すべき無用の膽魂、よく聞け今は諺にいふ枝も鳴らさぬ天下太平の折柄ぢやぞ、いはゞ人よりも家、身の力よりも親の光、町人ならば金庫の事、

結句、白痴は祖先の餘德を受けて睡れる豚の如く其まゝ無事に濟まうとも、野中の一本杉に等しく丸裸の聳えて出來し者は人目に際立つ道理、さらぬも角を丸めて見ざる聞かざる言はざる三猿の訓戒を守らずば叶はぬぞよ、自然の理に合うた捨處、あの高野山の麓とは汝が身に此上も無い塵外の拾はれ場所ながら、偖その佛界も件の次第で去りし後は猶更ら以ての事、もし汝が性來を包まず世に振舞はうとすれば、四十の曉を出でずして必ず劍難に死すべき相ありと見たぞ、加之も其劍難は思ふ敵でなくて思はぬ脚下の不意より殆ど寢息を刺さるべきほどの大難、わけて汝が身一人に止まらず、その砌には案外の恩人にまで不思議の累煩を及ぼさうも知れぬ筈、つまりは事なくて濟まぬ男ぢや、あの高田左門この飯尾殿いづれも生涯の大恩人に持つなどは異な事ながら、持たうならば我等の如き世捨人も同然、葬式に近い皺くちやの梅干親爺が互のためぢや、ゆめ汝の四十まで現在にあるべき年輩の人に養は

るゝな、わけて當主は禁物、ならば二十歳の後に一切の所縁を絶ッて、加之も其身は杖を忘れし盲目の土橋を這ひ渡るが如く、わざと心弱く淋しげに物事を恐れて行け、汝には汝の運命を容るゝ自然の器があるぞ、その器の外に一歩たりとも飛び出さば奇禍災厄、たちどころに來ッて鬼神に摑まるゝ骨相、ありゝと此老爺の目に見ゆるわ、何と思はるゝ飯尾殿、今こそ空を捻るやうな事ながら、貴方は我等より幾年の後まで目出たき壽命を保たるゝ御年輩、この觀相の中るか、中らぬか、まづ試みに御覽ぜよ、第一は本人の汝が身に別して忘るゝな」

我そも〳〵高野山を立去る時、みづから根來の荒法師といふ彼賴覺房さへ、しきりに我行末を戒めて檻の虎を野に放つが如く危みしが、今また生父の先役といひ師範分とも聞き及ぶ太田老人が言葉に、我生涯を判じて此まゝ無事に濟むまじき骨相ありとは、

重ね重ね前後の鑑定、元來どこに見極めしところあッてか、加之も手に取る如く我に對うて劍難の死相ありといふのみか、あきらかに年の數まで示して四十の曉、おもはぬ不意の脚下より禍害の神に覘はれて敵ならぬ敵に夢うつゝの寢首を搔かるゝ恐れありとは、いかに多年の經驗ある老功の言葉ながらも、あまりに辻講釋の賣卜者めいて、血の氣の通ふ人間の生身を木偶の數取にせし大口、虎を野に放つが如きか、猪を谷に追ひ込むが如きか、その訓戒を常に守りて身を謹むの外、我これを知らず、また四十の曉に果して寢首を取らるゝ劍難の死相あるか、現在の今宵このまゝ枕紙を摑んで頓死するか、その言葉を忘れず心に深く藏めて油斷なき外、我これを知らず、たゞ我は斯の如き運命に生れ來て斯の如き一身を行末の浮世に託するのみ、

さらぬも二歳の捨子あのまゝ學文路宿の朝露と消え果つべき我、また幸ひ高野一山の衆徒にも殺されざりし我、さらに獄裡の屍ともなりかけし我、僅十六年の間に三度の

大難を脱れて、やう〳〵こゝに一命を繋ぎしほどの危き運命を今日まで無事に保ちしかと思へば、今日より後の運命は我身に取ッての拾ひ物、たとひ如何なる淵瀬に沈むとも惜しからぬ生涯、風吹かば吹け雨降らば降れ、老少不定の人間に四十の死相を恐れて空しく天性を縮むべきや、もはや既に還俗せし男一代の冥加、そも〳〵不意の劍難に可惜ら膽魂を押潰して渡らるべきや、されど我こそ四十の曉に至るまで世にあるべき年輩の人を恩義の頭に持つなとは、いづれ免れぬ我身の禍災を其恩人に及ぼすなとの卜占、猶更ら以て空を摑むに等しき言葉ながら、正しく其言葉に當れるは現在この我を生みし父なれど、晴れて父ともいはれぬ飯尾家の事、また不思議の縁に今かく養はるゝ高田家の事、いづれも我その四十の曉まで無事に伴ふべき年輩とすれば、これのみは其まゝの空耳に聞捨となるまじき我身の境涯、おもへば今更ながら、心に兄と頼みし大泉周左衛門も、あの物の哀れに附き隨ひし勘

治平も、もとより我ために倒れて死せしといふにはあらねど、結び合せし自然の因縁、いづれも我を心にかけて思ひ過しつゝ其身の運命を閉ぢられしが如き形跡ありとすれば、此後の我ために盡すべき恩人また我ために如何なる不運の絲に手足を搦まれて思はぬ禍災の穴に踏み辷るやら、されば我一身、そも〳〵今後いづこに置いて行末の浮世を渡らんかと、自己が身の水火を物の數ともせざる宥觀の小太郎ながら、うまれついたる大根性に車軸の一轉、思はず人知れぬ眉を顰めぬ、

二歳の曉に山犬の空腹を肥すべき筈の捨子が、四十の曉まで生き伸びて無事に世を渡らば、たとひ何物の手に夢うつゝの寢首を搔かるゝとも、算盤球にかけて三十八年の拾ひ物、今こゝに十六とすれば今後の二十四年は火に燒かるゝとも水に溺るゝとも更に惜しからぬ生命、わざ〳〵捜し廻ッて急がねど面白き買手のあり次第、隨分そ

の場に男一代の活動、くわッと花々しく賣り込んでくれんとぞ思ひぬ、

それには猶更の事、我不運のため恩ある人に禍災を及ぼすの恐れありとすれば、なまなか緣の薄き生父が下の日蔭の落し子といはれ、また他人の厚き緣に養はれて義理人情の柵にかゝらうよりは、何事も知らぬ昔に返りて元のまゝに捨子生育、氏なく素性なく親なく同胞なく世間いづこの隅にも恩義なき身すがらの一本立となりつゝ、かく生れし我に來るだけの運命を浴びて押し渡らんとの決心、猛然として腸の底より天性不敵の宥觀が頭腦に沁み込みぬ、

されど顏色にも出さず、十六の年は其まゝ高田左門の恩義の許に暮れて、いよ〳〵十七の春は餘所ながら生父の飯尾作左衞門より男となりし祝儀の衣服大小まで贈られ、やう〳〵片手のうちに摑み込むほどの頭髪なれど、もはや人目に還俗坊主とも見えざる體、まして元來の骨太に逞しく生れたる自然の面魂、たしかに世上の二十歲を三

歲四歲も越えたり、

その正月の七日、主人は高田左門、客は飯尾作左衞門、小太郎がためには生みの父と今の養ひ父、こゝに三人うち解けながら、わけて目出たき今年初春の酒宴、いつしか夜に入りて猶更ら興を添へつゝ四方山の浮世話にうつりぬ、

「さて高田殿、あらためて申さずともの事ながら、これも今年まづ十七になりましたぢや、加之も世間體に勝れての大兵もの、又今後の御教訓に依ッては偖、さのみの愚鈍者とも存ぜぬ奴、もし武藝を仕込まば自然の骨法、いかな業が身に叶ひませうや、御鑑定を承りたい」

「や、折角の御言葉ぢやが、もはや我等方へ生涯を引取ッた貰ひ子、篤と考へて我等が思ふまゝ第一は本人の好むところを仕込むのみの事、憚りながら二歲の時の捨親殿へは、今更ら打ち明けて御相談もしかねる物の道理、はゝゝゝ」

「こりや見事に爲てやられたが、さても心憎う異なところへ味な角を立てらるゝぞ、はゝゝゝゝ」

「何とやら萬事の出入に就いて、去年までは兎も角、いよ〳〵今年より改めて我等が自由の逸物、力の及ぶかぎり文武兩道を仕込んで、天晴れ行末いかな男になるやら、こゝ三四年の後、是非に飯尾殿お手許の御子息達と較べて見たい覺悟、その砌の勝負は偖置き、かうならば我等、意地にも小太郎を產んだ母親への大味方ぢや、はゝはゝゝ」

互に隔心なく打解けながら、ます〳〵興に乘じて高笑ひの中に本人の小太郎たゞ一人、默然として眉を顰めし體、そッと額越に左右の面を見上げつゝ、此めでたき席上に不吉の涙を含みぬ、

客は人こそ知らぬ生みの父、主人は行末の養ひ父、その身また新に男振に備へし十七の初春を迎へて、諺にいふ水入らずの三人が正月の内宴、さらぬも打ち解けし小座敷より漏れ出づる笑ひ聲の中に、小太郎おもはず眉を顰めて不吉の涙、額越に左右を見分けながら膝を進めぬ、

「かやうに目出たき席上と申し、わけて末々の事まで、何かと御配慮を下さるゝ折柄、狂人めいた奴との思召も、存じながら小太郎こと、あらためて是非に、お願ひの儀が」

飯尾作左衞門よりも高田左門、まづ引取りての笑顏、

「や、いかに正月とて斯う隔心ない筈の我等が手前、あらためて願はずとも、身に思ふ事、またしたい事あらば何の會釋、はゝゝゝゝ新舊どちらも父ぢや」

「どちらも汝がために父ぢやとの仰せ、其お言葉に猶更ら以て、不孝の上の不孝を重

ねまする儀ながら、この小太郎、あらためて身の御暇、申さば御勘當、つまりは昔の父より二歳の曉に捨てられましたる奴、また十七の今日、あらためて現在の父より捨てられたく願ひまする」

きくや否、飯尾作左衞門、おもはず目を見張ッて容を正しぬ、

「何といふ、何といふぞ、今一度、申して見い、二歳の曉に捨てた父、いかにも文句は無いぞ、但し行末かくまで思はるゝ十七の父に今日、また捨てられたいとは汝、本氣で吐いたか」

萬事かうと打ち出せし上は、火水になるとも動かぬ天性、

「小太郎め、つら〳〵我が身を考へまするに、そも〳〵塵外の佛界にすら育ち損うて斯くなりまするほどの奴、とても氏ある歴々の御家門には猶更の不相應もの、さりとて過日、その御意を得ました御老體の骨相易斷では無く、眞實これ元來の野性、

おのれが居處を取違へて勿體なき行末の御恩を汚さうよりは今、このまゝに生涯不通の御勘當を蒙り、いかな風の吹きまするものやら、浮世の持ち運び次第に身を任せて、其日々々の浪々に送りたく心得まする」

兩人おもはず顔を見合して、そのまゝ等しく眼の光を此方に注げば、流石に頭を垂れて打ち伏しながら、もはや本心の決定、大地に根を持つ盤石の如し、

「佛も緣なきものは濟度し難しと仰せられまする事、つまりは此奴、お情の手にも道理の前にも外れた捨物と思召して、只管このまゝ御勘當を願ひまする、じたい小太郎、よしや世間晴れて飯尾家の嫡々正統に生れまするとも、また幸ひ御當家の世嗣に立てられまするとも、自然の根性骨、いづれ御意に反いて祖先の本流を横を堰き流しまする奴、それが猶更、あッて用なく、無くて事を缺かぬ儀に、所詮の結果、仇なる御高恩を重ねましては」

飯尾作左衞門、今は堪らず聲を荒らげて膝を突き詰めぬ、

「高田殿いかに言はるゝかは知らず、偖も面目なし、げに氏よりも生育柄ぢや、おのれ其處まで横に抛げ出したる奴性骨、もはや拾うて益も無い事ながら、うき世に落ちて何を身過に渡るぞ」

「たゞ捨物、たゞ捨てた奴、この横に抛ねた奴性骨、名ある名工の鐵火にも矯め直らぬものと思召して」

高田左門、閉ぢたる眼を開いて、今更ら其面體じッと打守りぬ、

「我等、旅籠でも無い、宿貸でも無い、一旦かく父子の約束した以上、このまゝ事も無いに生涯の暇はくれぬぞ、但し三年の間、希望に任せて浮世に出さう、二十歳の曉、いかな身となッて何處の里に罷り在るとも必ず一度は立歸ッて來よ、また此時あらためて五年十年、さては一生を許すやら」

小太郎、ふりあぐる面に兩眼の男泣き、ぽろ〳〵と涙を頰に傳はしぬ、

「假令、たとひ路傍に野倒死いたしまするとも、それまでの御高恩、この骨身に刻んで一念の業、必ず夢の御枕頭まで、まかり出まする、三年の後は」

市井の巷に一身を保ちかねし素町人も、田圃の草に頭を埋めし土百姓も、算盤球の緣に離れ鋤鍬を抛げ捨てゝ、入らぬ生命一個を資本に矢玉の中を飛び廻れば何の某と人に唄はれもし、運よく兜首でも取れば忽ち磨ぎ出しの馬鞍に槍印を押立てゝ肱を張るべき戰國の出世次第は、はや既に百年の昔となりて、たゞ世に後れし禿頭の茶飲談話を傳へ聞くのみ、

まして天下を骨拔鰌の如くせし元祿の華奢風流、たま〳〵寢恍けの夢を破りし赤穗の四十七士はあれど、いの字は京に佗住居さて女郎買でも忠義の出來るものと心得て、

身に沁む筑波颪の北風さへ花の大江戸と浮れ出す世の中、つゞいて寶永の空を靡けし寛活伊達には人の往來も機關人形の歩むが如く大道を練り歩いて、その横町の小路小路には男女いづれと正體の分らぬ奴が米の價を知らぬ色三味線、わけて正徳年間の數奇を極めし自己一代の全盛は、武家屋敷の玄關に伽羅の匂ひ満ちて町人の後園に能舞臺を築き、百姓の物見遊山に蒔繪の重箱を提げるほどの勢ひ、不漁の獻上鯛一尾が魚河岸より小判十枚に跳ねて丸の内へ飛び込むばかりの世の中とぞなりぬ、

されど武士の氏素性を取退けて祿を放ち、町人の家庫を揉み潰して店を閉ぢ、百姓の田畑を踏み荒して秋を奪へば、凡そ當時の人間これを丸裸のまゝに幾何の重量あるべき、たゞこれ五色に飾る雛人形の衣裳を剝げるが如く、うき世の雨風は偖置いて、一夜の露にも堪へぬ奴等が白日靑天の下に反り返ッて歌舞伎めいたる風俗を競ひぬ、

わけて正徳の末、享保の初年には、祖先傳來の寶刀を叩き賣ッて傾城を請け出す武家

が天晴れ思ひ切ッた仕方と譽められ、千兩の角地面を一夜の夢に抛げ出す町人が當世の冥加男に數へられ、また世に從ふ商賣の道も時の氣風に連れて、家々に呼び込まれつゝ猫の蚤を取る職人あり、往來に立ッて耳の垢を掃除する男あり、羽箒を持ちながら辻々に蹲んで塗下駄の塵埃を掃く職業あり、小鋏一挺を資本に御爪切と呼び歩けば、窓より鳥目を載せしまゝの兩手を差出して爪を切らすほどの世の中となりぬ、

さては大の男の頭にも髪の飾りに花簪なくて叶はぬかと思ひの外、をりしも誰いふとなく其頃の風聞に可惜ら無用の膽魂を賣り歩く奴あり、きけば年ごろ二十二三の色白に目鼻の凄みを帶びて、小うたに唄ふ名月や靑黛の大額に撥鬢の奴風、江戸市中の繁華雜踏を傍若無人に横行濶歩しつゝ、おのれ自ら他を呼んで押賣はせざれど、所望とあらば誰彼なしの買人次第に時の相場は其場の勝負といひたげの面魂、白痴か不敵か狂人か物數奇か、その名を浮世小太郎といふ、

高野山の關東詰所、江戸表一切を取捌く白金の別當、その門内より遠國の百姓らしき旅姿三人、この日本晴の春日和に全身濡れ鼠の如く水を浴びながら、すご〳〵として立出でし體、をりしも此方より葦笠に面を包みし染抜大模様の伊達男一人、悠々と歩み寄りながら小手に差招いて呼び止めぬ、

「卒爾ながら、そこへ行かるゝ三人の衆、ちと物を尋ねたい」

おもはず振り返りし三人、何とやら互に顔を見合して驚ける顔色ながら、五十ばかりの年長一人、中腰のまゝに小戻りして額越の慇懃さ、

「私どもに、御用でがな、御坐りまするか、はい、はい」

「異な事を聞くやうなれど、じたい汝等は何處のものぢや、また見れば全身の水濡れ、この白金の別當所へ何の用ばしあッて來られた」

三人の百姓、いよ〳〵俄に眉を顰めて、たゞ無言のまゝ笠の中を差覗けば、伊達男また笠の中より三人の姿、じろ〳〵見ながら差寄ッて聲を潜めぬ、

「言葉の端に紀州訛音といひ、江戸在番の別當所へ旅姿の駈込みといひ、頭上より水を浴せかけられた體といひ、こりや本國高野山の領民が願ひの筋あッて、はる〴〵來た甲斐も無う野山一流の法水叱咤、願意を水にされて叩き戻されたな」

「や、貴方様は」

「知る筈、かくすに及ばぬ、我等また元は紀州育ち、加之も野山を追はれて還俗の曉この江戸で死に損ひの生骨を曝す男ぢや、事の次第に依ッては隨分と力になるぞ、寺領の境界は伊都郡と那賀郡の兩郡内、十里に三里の五十二箇村中、どこの者ぢや、名は何といふ」

をりしも別當の門内より血氣に走せ出でし五六人の役僧、

「其方ども、何と心得て御門前を立去らぬか、此上まだ不屈の所爲あらば、引ッ捕へて奉行所へ突き出すぞッ」

聲もろとも、おの〳〵衣の袖を卷き上げて手に持てる大柄杓の水、ざッと頭上へ打かくるや否、かぶれる葦笠を脱ぎ捨てし青黛の伊達男、もの凄き顏面に眼を光らして歩み寄るかと思へば、一人の役僧の腕首、ぐッと摑みぬ、

「こりや何となさるゝ御坊達、我等こゝを通行の者、怪我過失でも無い水を男の頭上に浴びて此まゝ濟むか、濟まぬか、別當所へ案内さッしやい、さしづめ引ッ摑んだ此奴、それまでの人質、確と預かり申したぞ」

この關東の詰所たる白金の別當より水を浴びて濡れ鼠のまゝ追ひ出されし旅姿の百姓三人は、正しく本國高野山の領民が何をか訴願を踏み潰されし體と見るや否、昔は我

も同じ流れに吐き出されし宥觀、今は男一代を捨物に曝し歩く浮世小太郎、まして自己が頭上まで二度目の大柄杓に水をかけられし憤怒の面魂、つか〳〵と其まゝ大玄關の正面へ歩み入らんとする勢ひに、五六人の役僧おもはず前後を取圍みぬ、

「あの三人は當山本國の領民、入らざる餘所の添口はなりませぬぞ、まして今の水は貴方に飛沫もかゝらぬ筈」

「いや、かゝッたぞ、笠の編目を漏れて面に冷やり、但し御坊達は無用の枝葉ぢや、その水かけ論は偖置いて、是非に當院別當の挨拶を承る」

「當院別當を尋常の寺僧と見られたか、そりや御身のため、却ッて宜しかるまい事、いかな伊達衆も敵手によりまするぞ、はゝゝゝ」

「なに、何といはるゝ、素頭を丸めて袖長の衣に包まるゝ念佛坊主と思ひの外、當院

別當に限ッて尋常の寺僧で無いとは天狗の化物か魔訶波旬の宿借か、猶更ら以て面白い、あの三人は本國野山の領民その膏を絞ッて舐るも自由にせい、この男一疋は爪の垢も供養に備へかぬる心體、夜露に打たるゝとも末世賣僧の汚れ水を清淨の生面に浴びて濟まうか、南無や祖廟大師には御免なりませ、如是金剛方便」

叫ぶや否、右の片脚あげて前なる役僧二人の向脛を蹴飛ばしながら、門内へ躍り入りし玄關の傍らより五十あまりの老僧、不意に現はれて待ち受けし體、

「やれ珍らしい明王院の新發智、宥觀坊と見ましたぞ」

流石の小太郎、おもはず見返りて其老僧を打守れば、師の坊の許へ親しく出入せし行人派の寺僧、

「あまり門前の騒がしさに、そと隙見いたして喃、なれど今は隔てた俗界の人、何事も昔の事は語りませぬぞ、但し拙僧これにて挨拶いたしたい、また明王院の師坊も

昨年の冬、有難き往生を遂げられて」

「や、何と仰せらるゝ、師の坊が」

「往生せらるゝ際までも拙僧、その枕頭で加護念佛いたしたが、よく〳〵の弟子思ひぢや、在家に捨てたものなれど、あの宥觀どこの浮世にあらうかと、いはれましたぞ」

「は、はッ」

「それを持ッて廻ッて當院の盾とするでは無い、いかな事にも致せ、今日は此まゝ」

「は、は」

本國紀州高野山の領民が、はる〴〵關東の詰所たる江戸白金の別當へ來りて、頭上より水を浴せられしまゝ叫き出されし一事は本篇の主人公たる昔の宥觀小僧、いはゞ同

じ流れの末に吐き出されし還俗の浮世小太郎をして、竟に慘澹たる非業の最後を遂げしむるに至るを以て、こゝに讀者の煩を省くがため、これを小說外の上中下三回に挿んで、當時の惡逆暴戾を極めし高野山の衆徒と其虐政に苦みし領民反抗の事實談を左に揭げん、

其上

普天の下、卒土の濱、王臣にあらざる無しといふ語は暫く偖置いて、天下の權勢こゝに德川氏の有となりし頃さへ、なほ武家武門の支配を脫して、朝臣の料ともならず、幕府の領ともならず、大名の下にも居らず、別に一種異樣の特權上より地頭領主と稱する佛界宗門の一大怪物、たとひ人を殺し家を燒いて去るも足跡その寺門に遁れ入れば、磐石を空に吹き飛ばす武斷政權の力すら容易に追窮し能はざりしといふ、この不可思議なる高野一山の衆徒が下に生殺與奪を握らるゝ二萬四千石の民あり、

天正年間の高野山は十二萬一千石ありしが織田信長の時、熊野根來と共に征服せられて其十萬石を削られ、二萬千石たりしを德川氏に至りて更に三千石の修理料を加へられ、以上こゝに合して二萬四千石、その境界は伊都郡と那賀郡の兩郡內、紀の川の南より大和の國境まで延長十里に亙り橫は三四里の間、五十二箇村を有しぬ、

また高野一山には、學侶派、行人派、聖派、客僧派の四流ありて、二萬四千石のうち一萬石は學侶派の所領とし、一萬四千石は行人派の所領とし、聖派と客僧派は諸國より參詣登山の宿坊料と四方檀家への配札料とを以て無盡藏の寺領とせし外、別に古來より備付の大金ありて、年々これを俗界の在家へ貸し與へつゝ、利殖の道を講ずる事、市井巷閭の銅臭漢よりも峻酷にして加之も巧みなりしといふ、

されば高野一山の所領二萬四千石と稱するも、その實は學侶派と行人派の專有物にして五十二箇村の領民より膏血を絞り取る年貢一切の支配所を興山寺とは、讀んで字の

如く當山を隆興さすべき喜捨淨財の基寺といへど、つまりは自己等が懷中を肥すべき末世末法の賣僧が巢窟、この興山寺の役僧いづれも身に殊勝氣の法衣を纏ひながら心に生涯一度の讀經念佛せし事なく、たゞ朝夕に算盤球を彈き金銀を數へ桝の目盛に眼を曝して、隙さへあれば山の頂上より麓の領民を睨み下す勢ひ、よせ來る亡者を待てる地獄の鬼に等し、

加之も當時の制度として、幕府列藩いづれも年貢租稅を量るべき桝は天下一定の法則に從ひ、いはゆる京判と稱する公用無私の本目桝を用ひしに、何事ぞ塵外の靈跡と誇れる此高野山のみは却ッて聚領貪慾の法師原、竊に禁を破り法を犯して讃岐判といへる小商人の量り桝を用ひつゝ、京桝の一升に二勺づつ多き讃岐桝の總高、二萬四千石に四百八十石づつを多年の間に偷み來りしのみか、果は其讃岐桝の底を深くし口緣に松膠を盛り上げ糠を塗り立てゝ、天下定則の一升桝より五六勺づつを、永代の後まで

取立てんとするに至りぬ、

されど五十二箇村の領民中、もし悲歎の聲を放てば忽ち召捕ッて三年の牢獄に投じもし强ひて泣訴哀願するものあれば大杉の梢に縛りあげて天日に曝殺し、甚しきは罪なき妻子まで捕へて幽谷千仞の底に蹴落し、慈悲圓滿の名跡靈場は眼前水火の大地獄となりし折しも、こゝに島野村の戸谷新右衞門なるものあり、自己が一家の妻子眷族を刺し殺しつゝ其讃岐桝を後の證據に奪ひ取ッて江戸の將軍家に出訴せんとせし男一人、忽然として現はれぬ、

其中

農民を見ること糞壺の岨虫に等しく、たゞ一喝の下に土百姓と稱へし武斷政治の權力さへ、年貢租稅は天下一般の正しき京桝の制度を取りしに、千年の名跡たる慈悲圓滿の靈場と誇れる高野一山の衆徒が、竊に禁を破り法を犯して不正の讃岐桝を用ひしの

みか、さらに其底を深くし口縁を松膠に盛り上げ糠を塗り立て、多年の收斂虐政を恣にし、加之も泣訴哀願するものあれば忽ち念球を抛げ捨て法衣の袖を卷き上げて苛責の獄卒となりつゝ、二郡五十二箇村のあらんかぎり二萬四千石の領民が子々孫々のあらんかぎり、その膏血を絞り取らんとするの振舞いかに淺ましき末世末法の賣僧とはいへ、あはれ大悲大師の祖廟は惡鬼羅刹の棲家となりぬ、

こゝに島野村の戸谷新右衞門なるもの、年三十七、平生は處女の如き無爲無言の小男なりしが、猛然として睡れる獅子の兒の動き出すが如く、人知れず高野山に這ひ上りて年貢收納所とせる興山寺の床下に忍ぶこと三日三夜、さらに油斷なき役僧の寢息を窺ひつゝ不正の讃岐桝を盗み取ッて、人跡いまだ到らざる山後の幽谷を傳ひながら、幸ひ猛獸の餌食ともならず、やうゝ七日目の曉に自己が村まで歸りし後、向副、堅堂、横座、島野、丁田、馬場、田宮、河根、東畑、西畑とて五十二箇村中に重

立ちし以上十箇村の同志連判を募りしに、いづれも其義氣に感泣して生佛の如く拜謝合掌すれど眼前に妻子眷族の死を恐れて進み出づるものなく、たゞ丁田村の涌井莊五郎と東畑の佐次兵衞と田宮村の野右衞門と三人のみ、もろともに一家一族を刺し殺して、江戸に直訴せんとぞ勇み立ちぬ、さらぬも絶え間なき一山衆徒の飛耳長目に取圍まれて、夜半の窓漏る怨聲さへ其曉は忽ち一家眷族を失ふほどの折柄、二郡の領民いづれも恐れ戰いて舌を卷きしが、流石に義人の妻子を見殺しになし得ず、もし露現せば五十二箇村の農民これを守りて他國の領境まで送り屆けんとの誓言に、享保元年の冬十一月、まづ以上の三人を竊に立たせし後、戸谷新右衞門たゞ一人、その十二月の七日の夜、涙と共に妻子の寢首を搔いて人にも告げず生れ故郷の空を出奔し、かの不正の讃岐桝を布に包んで脊に負ひ、廻國非人の姿となりながら東海道の驛々に食を乞ひつゝ、野に臥し山に寢ねて江戸に向ひぬ、

戸谷新右衛門が江戸寺社奉行に糺問せられし時、いかにして脊に負ひし桝を見咎め、られず、そのまゝ無事に函根の關所を通りぬけしかと問はれしに、かぶれる菅笠に蓋する如く掩ひ隱して跪きながら大地に打ち伏せしと答へしかば、其後は江戸より箱根の番所に沙汰して、以後通行の者は悉く道中笠の裏を改め決して膝の邊に俯せたるまゝの通行を許さずなりしといふ、

また一說には高野山の衆徒が戸谷新右衛門の出奔せし三日目の後、始めて斯くと知るや否、俄に三十餘人の追手を走らせ、また折しも同藩の朋友七人を殺して寺門に遁れ來りし井出要左衛門といへる兇惡無賴の浪人に追はしめしが、遠州の濱松にて新右衛門を追窮せし時、たま〳〵この要左衛門を搜し求めし敵に出逢うて助けられ、加之も要左衛門は其場に打たれしといふ、

其下

高野山所領の二郡五十二箇村中より丁田村の涌井莊五郎と東畑の佐次兵衛と田宮村の野右衛門と以上三人を、まづ竊に立たせし後、戸谷新右衛門たゞ一人、廻國非人の姿に身を窶しつゝ、わざと後れて東上せしは、いづれ地頭の追手に道中筋を覘はるゝの虞れありしがため、また深夜斷腸の血涙に妻子の寢首を搔いて人にも告げず出奔せし心體、同じ死を決せし中にも自己は發頭人として萬一の助命を叶はざるのみか、加之も證據の讃岐桝を菅笠に隱して番所の役人を欺き天下の關所を通りぬけし罪科また別に輕からざるを知れば、たとひ幸ひに訴願を達するとも、故郷の空に妻子を殘して鬼に等しき惡僧原の餌食となすに忍びず自己は固より江戸の空に刑餘の骨を曝さるべき覺悟を極めぬ、

天下をあげて夢うつゝに迷ふ不夜城の歌吹海、嚴めしき武家の大玄關に女童の白粉臭き伽羅の匂は滿ちて、命を義に捨つること鴻毛よりも輕しとせる武士道が酒色の巷

に海鼠の如くなりし當時、山里の片田舍に生れたる土百姓より斯る鐵腸の義人が現はれ出でんとは、いかに高野一山の衆徒が暴戾貪慾の苛政を施せしか、

二萬四千石の領民いづれも日夜その眼前の虐政無法に泣いて苦しむのみか、子々孫々の末までも絶えず膏血を絞り取らるゝ事とは知りながら、偖いよ〳〵身を捨てゝ一死貫徹の曉となれば、只こゝに四人の外なく、加之も其三人は妻子を故郷の空へ殘せしも、五十二箇村の農民これを守るの誓言ありとはいへ、流れ易き人情の涙に溺れて、さしもの勇氣も半途に挫折の虞れあり、わけて一朝一夕には濟むまじき事、一年二年、もし三四年の久しきに渡れば其間いかなる不意の變あらんも知れ難しと、戸谷新右衞門おのれは固より惜しからぬ覺悟の生命なれど、我みづから我を珠玉の如く取扱ひぬ、とても詮なき業と知りながら、後日のため一應の手順として、まづ三人の同志に關東詰所の白金別當へ哀訴歎願せしめ、また更に時の寺社奉行へ駈込ましめ、いよ〳〵訴

訟の甲斐なしと見極めし後は、そのまゝ三人を無事に故郷へ歸して自己一人あくまでも踏み止まり、大老の登城を待ち受けて死骨を抛げ出すか、さては將軍家の御成先を覘うて駕訴するか、いづれにせよ天下禁制の上塗に松膠を用ひて底を深くせし此讃岐桝へ溢るゝばかりに我血汐を盛らずば動かじとの覺悟、地軸より岩石を積み上げたる大嶽に等しけれど、傳へいふ戸谷新右衞門は五尺に足らぬ瘦形の小男にて、目は常に睡るが如く人に語る聲さへ細く初心の處女に似たりしとぞ、

白金の別當所より濡れ鼠の如く水を浴びて追ひ出されし三人の百姓は、本國高野山所領の二郡五十二箇村の犧牲となッて此江戸に死骨を抛げ出したる丁田村の涌井莊五郎と東畑の佐次兵衞と田宮村の野右衞門なるもの、また發頭人として最後の後殿に備へたる島野村の戸谷新右衞門なるもの旅籠町の宿にありと聞いて、さらぬも野山一體

に殺され損ねし昔の宥觀小僧、今は猶更ら當世に用なき生膽一個どこに棄てんと思ひし浮世小太郎、たゞ何となく五臓六腑の跳ね出す心地して、や面白いぞ、面白いぞ、まして天下いかなる虐政の藩主といへど收斂の姦吏といへども、流石に年貢租税は公用一般の京桝を用ひて一定の禁制を破り得ざる世の中に、何事ぞ、千年の名跡として隨喜渇仰の涙に包まれ清淨無垢の靈場として慈悲圓滿を旨とせる塵外佛界の一大宗門が、其法を犯し制を偷んで貪慾の讃岐桝を用ひるのみか、加之も底を深くし口縁を松膠の糠に塗り上げ盛り上げて領民の膏血を子々孫々の末までも絞り取らんとするは、佛のあるところに鬼が棲むとの世の諺を現在の眼前に見る惡魔外道の巢窟、さらに面白し、いよ〳〵面白し、もとより入らぬ生命の捨場いづこの里にせんかと迷ひし我この浮世小太郎、身に受けし昔の遺恨を報ふにはあらねど自然の因縁、またその高野一山の衆徒を敵手に斯くまで面白く得難き最後の墓場を見付け出さんとは、

わけて我二歳の昔、學文路宿の朝露と消え果つべき身を拾はれて、十六の曉まで育てあげられし明王院の師の坊が、はや既に現世を去り給ひしと聞く上は、そも〳〵何物にも憚らざる還俗の我こゝに男一代の天晴僥倖者、其場の意氣地に脱れ難き敵とあらば文盲の匹夫一人を敵手に死すべき生命が、古來の天下取さへ容易く手を入れ難き千年不可思議の一大魔窟を敵に取ッて、遠くは宗祖大師の靈廟に十六年間の法恩を蒙りし宥觀が御恩報謝のため、近くは眼前二萬四千石の領民を子々孫々の末まで助けんとする浮世小太郎が最後の活動、あの高野全體を覆して現在の末世賣僧幾萬人を一時の生地獄に掃き落しくれんとの念力願望、炎々として猛火の如く全身を包みぬ、

旅籠町の道者宿、奥まりたる一室に燈火をかゝげつゝ、訪ひ來し浮世小太郎の前に始めて立出でし戸谷新右衞門、なるほど見れば土臭き百姓に似合はぬ優形の小男ながら、

一癖どこやらに底光りのある眼中、流石に二郡の浮沈を一身に引き受けて死すとも動かぬ面魂を含みぬ、

「はい、はい、私めは紀州高野領、島野村の戸谷新右衞門と申しまする百姓、承れば今日、三人の同行が白金別當所の御門前で、うかと致せば猶あの上の難儀にも及びまするところを、ふしぎの御縁か、貴方様のお力に依ッて、やう〳〵其場を無事に遁げ歸りましたとの事、わけて御江戸不案内の遠國もの、有難う御禮を申し上げまする、はい、はい」

「や、わざ〳〵今日の禮いはれに來たではない、この男また元來あの白金の別當へは本國の野山以來、ちと面白からぬ事のあッたもの、それが三人の衆より訴訟の大略を聞いて猶更、はゝゝゝ幸ひ入らぬ生命一個を持て餘した折柄、いはゞ當座の進物、遠慮なしに使うて貰ひたい料簡でな」

「はい、はい、實は三人の同志が歸りまして、地獄で佛に逢うたとの物語、今日の御恩ばかりか、この上の思召までも、うす〳〵承りましたものゝ、さて片田舍の百姓どもが衄虫のやうに這ひ出した泣面事に、あたら貴方様を」

「いかにも用心、あの三人の衆とは違うて、さうあるべき筈ながら、たゞ好奇心の餘所事でも無い自然の因緣、元は高野山明王院の新發智宥觀といふもの、明神の壇上を汚して一山の衆徒に糞騷動を起した事、その頃の噂に聞き及ばれずか、それがために最勝會の相撲に引き出されて、音に聞えた麓の大力あの名倉の勘治平といふものに抛げ殺さるべき筈の生命、やう〳〵助かッて無事に山を追ひ下されたが、その砌には高野所領の村々より雲霞の如く見物に押し寄せた事、たとひ目に見ずも、よもや耳にせられぬ筈は無い當時の小僧、この江戸に還俗して後も白金の別當より絶え間なく附け覘はれ、一度は獄中の屍となりかけし死に損ひの男ぢや、はゝゝゝ幸

ひ時の味方に取ッて悪うは無いぞ、はゝゝゝ」

戸谷新右衛門、今まで睡れる如き瞳を定めて俄に小太郎の面體、じッと見詰めながら、さてはと思ふ體に幾度か首肯きぬ、

「やれ〳〵、あの時の風聞に高かッた明王院の新發智樣か、これは不思議の事、異なところで御意を得まする、いや私め、其節は見物に上りませずとも、はい、はい」

「いはゞ自然に生命の絲筋を引いた廻り合せの味方ぢや、はゝゝゝ面白う思はれぬか」

「面白いとは恐れ、私ども身に取りましては正しく百萬の力にもなりまする事、二萬四千石の領民に代ッて末世末代までの御禮を申し上げまする、但し現在、差當ッて御味方下されうとの思召は、戸谷新右衛門、憚りながら、今日只今あらためて御謝絶申し上げまする、はい、はい」

元來あの高野山には我も面白からぬ仔細あるもの、この白金の別當には猶更ら心の底に殘りし一文句のある男と、只これだけの言葉にさへ盲龜の浮木を得たるが如く喜びし三人に引き替へ、その一人の宿に殘れる發頭人の戸谷新右衛門へは、宥觀の昔より今こゝに浮世小太郎といふ身の素性來歷を具さに打ち明して、加之も幸ひ持て餘せし生命一個を進ぜんとまで力を込めしに、此奴たゞ張子の虎に等しく頭を左右に打ち振ッて思召は有難けれど御無用との一言に、流石の小太郎も拍子ぬけて案外の體、いかに死を決して故郷の空を立出でしとはいへ、遠國の片田舍に育ちし世間知らずの百姓四人が、はる〳〵この大江戸に來りて加之も泣く子と地頭に勝たれぬといふ諺さへある、その地頭も地頭こゝに千年の根を固めし塵外の一大不可思議、武家武門の力にも動かし難きほどの高野一山を相手取りて、黑白邪正、讃岐桝一個を證據に爭はんとするは、蟷螂の斧を以て鐵壁を斬り破らんとするに等しき業、ならば手柄に仕遂げ

て見よと、今は小太郎も思はず冷かなる微笑を残して立去りぬ、

されど土百姓としては天晴の根性骨、いかにも不敵の膽魂を備へし奴、あの三人の同志が頻りに袖を引いて私語きし言葉に耳も傾けず我この小太郎が生命を抛げ出して力を添へし言葉に目も動かさず、たゞ頑として御無用との外に一言も發せざりしは、實は此まゝ捨てゝ歸るに惜しき男ぞ、まして覘ひの的は我身に取ッても生涯また得難き骨節の曝し場所と、可惜ら草叢に瓊玉を見付け出しながら立去る心地、

淺草見付の外、御藏前の裏道、三味線堀の根際にかゝれる鳥越橋の片邊、茂れる椎の大木に蔽はれて白晝さへ薄闇き樹蔭に、そのころ化物小屋とて年久しく人の住まざる一軒屋あり、鳥越橋とは鳥越明神よりの呼名、これを猿子橋とは此邊に猿曳の多く住みし故事の名稱、また地獄橋とは昔この地に刑場たりしころ一度この橋を渡れば生

きて歸られざる罪人の心を取りしがため、さらに甚内橋とは寛永年中の音に聞えし不敵の名物男、向坂甚内といへる剛强無類の大悪戯者が搦め取られしよりの名なりといふ、

向坂甚内は何者の子なりしか、たゞ忽然として寛永年間に現はれし男、そも〳〵同じ人間が自力の外に、上下貴賤の差別あるを癪癪玉に觸へて餘所に見る能はず、また太平の世の粧飾人形に等しき奴等が飛ぶ鳥落す權勢を面白からず思ふの餘憤、夜な〳〵市中を徘徊して身分ある歴々の武士と見れば忽ち喧嘩口論を吹ッかけ、加之も電光石火の早業に當の相手を斬るや否、風に木の葉の散る如く去ッて其行方を失ふのみか、果は大名高家の寢床にまで忍び入り、定紋のある品一個を盗み出せし後へは必ず向坂甚内推參の六字を筆太に書き殘しつゝ、加之も其品は夜あけて人の群集すべき往來の中央に踏み碎いたるまゝ打ち捨てし變幻出没の自在、いかに探れど影さへ捕へ得ざりし

こと六年、何ぞ圖らん、この大膽なる甚内の久しく身を忍びし隱れ家は、當時の刑場に臨むべき地獄橋の片邊、罪人に最後の死水を與へし水茶屋の奥にて、その水茶屋の主人は甚内がための舊僕たりし事まで露見の曉、一時に家の前後左右を取圍んで押し寄せし時は、甚内たま〳〵瘧疾を病み煩うて平生の自由を失ひつゝ召捕られしといふ、

この甚内が召捕られて首を斬らるゝ時、山の如き見物を見渡しながら、我そも〳〵瘧を病み煩うて一寸の身動きもならざればこそ畦道の蝗さへ手に餘すべき奴原に斯く容易く捕られしぞ、さても瘧ほど世に苦しき無念の病なし、されど我魂魄この地獄橋の水中に長く止まりて諸人の瘧病を助くべく、また忍びし彼家を我ための宮とせよ、もし取毀つか住み荒すものあらば心ず半年の間に祟るべしとの一言を殘せし以來、誰いふとなく瘧を病むもの鹽を水に流して祈れば效驗ありとて、その橋の名まで甚内橋と

呼びつゝ、加之も刑場は他に移されしが甚内の隱れ忍びし水茶屋の跡は其まゝ椎の樹蔭に存して、いつしかこれを鳥越の化物小屋と言ひ傳へぬ、向坂甚内の死せしより四十餘年の後、知るや知らずや、かゝる不吉の因緣を宿せしまゝ久しく陰氣に閉せし此空屋へ住み込みしは例の浮世小太郎、獨身の土鍋飯に腹を肥して既に半年を過せど、身に瘧病の鬼祟をうけざるのみか、五體いよ〳〵健全に蚤蚊の刺せし痕もなし、

猿子橋、鳥越橋、地獄橋、甚内橋、たゞ一條の小橋に四個の名を傳へし片邊、白晝さへ薄闇き椎の樹蔭に誰いふとなき噂の化物小屋、この江戸繁昌の町中に四十年來の陰鬱たる鬼氣を閉せしまゝの一軒屋、かの向坂甚内が最後の一念に恐れて毀ちも得やらず打ち捨てたりしを、かくと聞いての好奇心か、偖は人の心に吹き入る其ころの臆病風を追ひ拂はんとてか、近來こゝに住み込みしは月に僅少の店賃を助かるほどの風情

でもなき浮世小太郎、さらぬも人の目に立つ元來の色男振に獨身の伊達小袖が、朝夕の味噌醬油を手に提げて土鍋飯の氣樂さに無事息災の體、みづから求めて名を賣らねど自然と世間に聞えて、いつしか甚内橋の小太郎と言ひ囃され地獄橋の浮世男とも稱へられぬ、

加之も家に小判一枚の貯蓄さへなき境涯と思へど、偖いづこより誰が仕送りを受くるやら、こゝに半歳あまり猶この後とても朝夕さらに物の不自由を知らぬ體、また着替を入るゝ古葛籠一個もなく絶えず四季をり〳〵の新しき伊達小袖を纏ひつゝ、惜しや男振だけでも天晴れ武家奉公に叶ふべき骨柄を備へながら、仕官の希望もなく出世の利慾もなくて、小歌に唄ふ世の中を何の絲瓜の皮羽織、ぶらりと懐手のまゝに其日を送る不思議さ、猶更ら人目の關は脱れず噂の種子となりて、果は四邊近所の耳に口、わざ〳〵好んで住む家が家なり、もしや傳へ聞く向坂甚内の恐ろしき子ではないか孫

ではないかと、おもはず往來の眉を顰めて門口を差覗きぬ、

されど本人の小太郎いよ〳〵悠々として平氣の體、やう〳〵今年こゝに二十四の曉なれど、鷹の如く人を射て鋭き眼中、自然に五體の隙間なく凛々しき骨相たしかに三十の上を越せしかと思はるゝ毛深き大男、出づる時は雨にも風にも飄然として開け放ちしまゝ入口の戸を閉さず、また歸れば晝も夜もなく大の字形の高鼾に食事の外は身も動かさず、たゞ食ふと寢ると出歩くのみの業に、猶更ら世間の目より怪しまれつゝ、加之も藁小屋の底に火の粉を包むが如く心を置かれぬ、

されば人の風聞に上れど、誰とて親しく訪ひ來る朋友もなき此不思議の怪しき家に、一夜の雨そぼ降りて更け渡りし頃、竊に門口の戸を叩く音、

家内には寢るに川なき燈火とや、まッ闇がりの中に鼾のみ高く聞えて應ふる聲なし、

月に一度づつは心ず借屋住居を見巡るべき町内の組頭さへ、白晝に門口より差覗いて無言の會釋に行き過ぐるほどの家を、この雨夜に更け渡りし後、ふしぎや何物か打ち續けて戸を叩く音に、おもはず獨寢の夢を破られし小太郎、燈火もなき黑闇の中より枕ながらの聲、

「誰ぢや、わけて今ごろ、この夜深に雨を冒して人に訪はれぬ筈の家、もし門違ひでは無いか」

かくと聞いて戸外よりの聲、目に見えねど慇懃の體、

「いや、門違ひでは御坐りませぬ、たしかに當家樣と存じて深夜の恐れも憚らず、はい、はい、あの旅籠町の宿より伺ひましたもの」

さては其人かと、小太郎さらに耳を欹てながら、かくても平生に心覺えの用意ありけん、枕頭を探りて燧石を打つ音、やがて蠟燭に火をうつしぬ、

「その戸口に鍵はないぞ、手をかけて左に引けば開く筈」

そろりと引開けて身を縮めつゝ内に入りし男、まちうけし火影に見れば、果して戸谷新右衞門、徒跣のまゝに紙合羽を纏うて雨に濡れし中腰の體、

「ものゝ二日と隔たぬ前夜の今夜、たゞ一言の下に跳ね付けられた此、この不器量ものへ今更ら何の用あッて」

「はい、御謝罪のため」

「前夜あの時は入らぬ生命の捨物ながら今夜こゝでは蚤に刺されても血の氣の惜しい男ぢや、あまり口が過ぎたと思へば其事に就いての一言は聞かうが、もはや西南に向うての禁物、桝の目に量り込まれる手足はないぞ、はゝゝゝ」

「はい、はい、その儀も萬々、心得ましての事、せめて御手の蠟燭が半分になるまでの間、この土百姓めに御耳を」

「む、蠟燭の半分まで耳を貸せとは面白い、まづ上れ」
戸谷新右衛門、紙合羽を脱いで兄の泥を拭き取りながら、這ふが如く座に着けば、小太郎その手の蠟燭を箱枕の横に押立てゝ雙腕を組みぬ、
「元は高野の明王院に育ッて新發意の宥觀、山を追はれた身の成果が今この江戸で浮世小太郎といふ還俗の名を告げたれど、告げぬ筈の此家を誰に聞いて來た」
「聞きませずとも實は前夜、そッと御歸途の後より」
「や、後を付けて見届けたとか」
「現在、自己等の子々孫々までが身の膏血を絞り取らるゝ事でさへ、二郡の五十二箇村中より僅四人の世の中に、まして思はぬ不意の御力添は百萬の味方を得ました心地、佛神の加護とも存じまする折柄、勿體ない、何として可惜ら思召を無に致しませうや、これには聊か彼同志三人にも打ち明されぬ私め一存の仔細ある儀、なりやこそ此お宿を見届け置きました今夜、この雨中に深夜たゞ一人」
「兎も角その仔細を聞かう、五十二箇村中より僅四人といふ、その四人のうちの三人へも打ち明さず此、いはゞ横合から好奇心に飛び込んだ不意の此男へ一存の内々とは」
戸谷新右衛門、俄に膝を進めて箱枕に立てる蠟燭の滅工合と小太郎の面體、じろりと睨み分けぬ、

戸外には軒を蔽へる椎の大木に夜更けしまゝの風を含んで雨に添ふ音、家内には箱枕の横に立てし蠟燭一挺の火影に四十年來の人氣もなく荒れ果てし隅々ぼッと薄闇く、名さへ地獄橋の因果を宿せる片邊、何とやら物凄き中に入らぬ生命を持ちし主人の小太郎と死骨を拋げ出せし戸谷新右衛門の只二人、そッと聲を潜めて物語る深夜の體、

もし窓より漏れて聞けば惡魔の私語くに等しかるべし、

「只今も申し上げまする通りの次第、これが役義御免の例ある代官所の支配か、但し御國替その他の不首尾になるべき大名の領分か、また動かし易い旗本の知行でもあれば格別の事、申さば御政道の外で千年の根を固めた宗門の地頭を相手取ッて、高野一山の目からは御山の木葉一枚にも及ばぬ風下の麓に湧いた土百姓が僅三四人の生命を物種の訴訟沙汰、とても叶はぬ儀とは存じますれど、いよ〳〵叶はぬといふ死際の蟲の息を引取るまでは此まゝ、あきらめ兼ねまする心體」

「や、面白い、無事に生きても百年を越さぬ筈に生れた人の生命ぢや、事の成る成らぬは偖置いて、その一念の大願が面白い、本國では高野山の木葉一枚に及ばずとも、この江戸で二萬四千石の領民に替る四人の屍、まさか痩犬の腹も肥すまい」

「つきましては私ども四人、死なば諸共と覺悟いたして罷り出ましたものゝ、偖あ

の三人は故郷の空へ妻子を殘したまゝの出立、いかに其場の嬉しさとは申せ現に昨日の朝、白金別當の門前に始めて御意を得ました貴方樣へ大事の訴訟沙汰を打ち明けましたほどの男、もし自然の人情に引かれて萬一の恐れ、又本國では必ず其妻子が召捕られて人質になるべき筈、結句この新右衞門が足手纏ひ、幸ひ事なき今のうち故郷へ歸して、わざと前非後悔の宥免を願はせ、その油斷に私一人この江戸で證擔の讃岐桝へ生血を盛り上げまする覺悟ながら、こゝに一事の御慈悲を仰ぎたき仔細あッて」

「や、諺にいふ木で鼻を括ッた前夜の無挨拶、そろ〳〵會得しかけたぞ、偖あの三人が妻子を殘して、その一人の御身は」

「不愍ながら私め、とても助からぬ妻子の寢首を搔いて、あの三人の後より出奔いたしました」

「出來た、む、出來た、たとひ如何なる不思議の敵手にせよ、それほどの念力が通らいでか、大煩惱、大根性、なるほど五十二箇村中の領民よりは勝れて出た三人も、その大丈夫の魂魄には足手纏ひの筈、あらためて生命を進ぜたい、何の慈悲に及ばう」

「お生命までは、あまりに勿體ない事、たゞ當分のうち、首尾よく訴訟を差出すまでの間、江戸不案内の遠國もの、この新右衞門を内々そッと御隱し下されまいか、實は出奔の道中さへ追手に覘はれました私め、あの三人を本國に歸しました上は、いよいよ一人その的となッて、いづれ俄に白金の別當所より嚴しき市中の詮議ある筈」

「や、心得た、確實に引受けたぞ、大事を抱へた身を忍ぶには幸ひ不吉の名に聞えて人も立寄らぬ此家、もし此家で叶はずば、まだ外に一個所の穴、よし覺られても容易く捕方十手の入らぬ隱れ家を持ッた男ぢや、はゝゝゝ」

妻子の恩愛に道を踏み迷うて他を殺す罪惡よりも、良人として妻を殺し父として子を殺すの不人情は、さらに殘忍非道の業、そもく人間にあるまじき惡魔の所爲ながら、その不人情を血の涙に忍んで固より捨物の一身こゝに外道の大惡魔とならざれば、あるか無きかに等しき土百姓の身を以て千年不可思議の雲表に聳えたる高野一山の地頭を敵とせし戸谷新右衞門、大義は親を滅する諺にもあらず身を殺して仁をなす古語にもあらず、たゞ現在の眼前に自己を忘れし一念不動の大願、とても世間恩愛の人間としては叶ひ難し、

されば二郡五十二箇村中より進み出でて我と共に死生を誓ひし三人の同志も、たゞその二郡五十二箇村中の領民に勝れて進み出でしのみの業、あはれに勇ましき心の覺悟は殊勝ながら、自然の人情に引かるゝ恩愛の妻子を敵の人質に等しく故郷の空に殘し置いて、いまだ自己の身を外道の大惡魔と化し得ざる上は正しく世間の人間、いかで

か其人間を平生の餌食とせる高野一山の大敵に對うて此念力を貫かるべき、

されど戸谷新右衞門、たゞ一心の底に深く祕めて顏色にも出さず、竊に三人を說いて再び白金の別當所へ駈け込ましめ、自己は其まゝ證據の讃岐桝を脊負うて何處ともなく姿を隱しぬ、

二郡五十二箇村の領民が一列同體の死骨を拋げ出せば兎も角、わづか其中より萬分一にも足らぬ生命を物種としても迚も叶はぬ千年傳來の地頭を相手取りつゝ一時に無用の屍を曝すよりは、一人づつ訟へ出でて事の成否と死生の定まりし後また一人、また一人、四人おの〳〵順々に絕え間なく死覺悟を差出さば、公儀の目にも今後どれほどの人數あるかと疑はるべき筈、それには發頭人の我まづ犧牲となり果てし後の事、加之も三人このまゝ前非後悔を白金の別當所へ屆けて本國へ歸れば、敵の油

斷に乘じて江戸表の活動に萬事の便利ありと前後の利害を說かれし丁田村の涌井莊五郎と東畑の佐次兵衞と田宮村の野右衞門と以上三人、口にこそ言はねど實は人知れぬ心中に果して敵の懷中へ殘せし故鄕の妻子を氣遣ふ折柄、まして眼前の道理に一言もなく首肯きぬ、

また白金の別當所は斯る深き策謀に最初より影さへ見せぬ發頭人の戸屋新右衞門ありとは知らず、さらに本國本山の不正を公義へ出訴して千年の根を覆さんとするほどの大膽不敵なる者とは思はず、よし出訴すればとて訴狀と共に忽ち公義より引き渡さるべき古來の寺格に平然たりし折柄、その三人が今更ら俄の半泣きに前非後悔を申し出でしかば、三日の間を寺中の一室に禁獄せし後、またもや白晝の頭上に法水叱咤の水を浴せて濡れ鼠のまゝ江戸の町外れ品川の宿より追ひ放ちぬ、

あとに殘りし戸谷新右衞門たゞ一人、もの凄き顏面に冷かなる微笑を浮べて、五尺に

足らぬ小男ながら天生の膽魂を押据ゑたる體、百錬の鐵に等し、

白金の別當所に三日禁獄の後、白晝の頭上に水を浴せられ、濡れ鼠のまゝ江戸の町外れ品川の驛端より追ひ放たれし高野領の三人、丁田村の涌井莊五郎と東畑の佐次兵衛と田宮村の野右衛門、やう〳〵立場茶屋に走せ入りしが、路銀の外は一切の手荷物を取上げられて着替の衣類もなければ、幸ひ照り續く街道の秋の日に乾かしながら、なほ後より追はるゝ心地、思はず道を急いで遁ぐるが如く六鄕の渡船場を打ち越え、川崎の八町畷まで來かゝりし時は、いつしか竝松の腰より洩れ來る夕陽を横にうけて地に引く三人の影、ぱッと心細げに長くなりぬ、

をりしも夫婦橋の葭簀茶屋を立出でし旅姿の一人、三人の後より笠を深くして歩みしが、鶴見の庚申堂に近づきし頃、俄に走せ付いて四邊を見廻しながら、そッと立寄り

しを見れば戸谷新右衛門、

「や、新右衛門殿、何として此處まで、もし我々に言ひ殘された事あッてか」

新右衛門、無言のまゝ庚申堂の森影に引入れて、切株に腰うちかけつゝ、今更ら三人の顏じッと見詰めぬ、

「緣あッて同じ土地に生れた先祖代々の馴染も、これが一生の死別ぢや、せめて息の根のあるうちに今生の暇乞かたゞ〳〵、未練ではないが內々そッと見送りに來ました、また新右衛門の生面も見せ終焉ぢや」

三人おもはず差俯いて、聲を曇らせながら顏も得あげず、

「嗚呼お互に此、この廣い日本國で幾百萬石といふ領分知行のある中から、わづか二萬四千石の運わるう、さて〳〵酷い地頭の下に生れ合したものぢや、」

「それは今更ら泣いても口說いても詮のない事、その酷い不運の地頭を戴けばこそ鋤

鍬の柄と共に朽ち果てゝ目出たい筈の百姓が、無事の死體を檀那寺の墓へも葬られず、生涯見物せずとも事の足るべき日本一の大江戸で不吉の骨を曝すのぢや」

「その骨を曝す覺悟で出た四人のうち、貴方一人を殘して我々三人が」

「いや〳〵、振り捨てゝ歸るも振り捨てられて殘るも心は同じ事、いはゞ一番手に出る我生命の替掛ぢや、つまりは五十二箇村を脊負うた三人の身ぢや、隨分と油斷なく賴みましたぞ、また事なきうちに前非後悔を立てゝ歸れば固より無事な筈、いや却ッて他への手本に案外の譽物とならうも知れぬが、さて一應は山へ引き上げられて取調べられ、加之も第一に戸谷新右衞門の詮議あるは必定、その節は幸ひ御身等三人に後れて只一人出奔した我、わざと初めて聞いて驚き顏に口を揃へて貰ひたい、どこに居るやら僅の間に廣い江戸の空、もし逢へば無理にも引き連れて歸らうもの、一切さらに影も見ぬとの返答」

「いふまでもない事、されど萬一のため我々との内通、どこに身を忍ばれるか、その隱れ家を」

「いや、敵の矢坪に覘はれぬ一策、わざと江戸中を其日々々に流れ渡ッて、こゝといふ寢起の場所を定めぬ心體ぢや、ものの丸一年の後に何の音沙汰なくば聲も得たてず其まゝ犬死の證據、もし訴訟の本望を達せば必ず一年のうちに高野一山の役僧が山を遁げ下るか追ひ下さるゝか、いづれ五十二箇村の耳目に入るべき筈、但し遂げても遂げずとも此新右衞門は無い者、これが生き別れの死に別れぢや、さらば、おさらば」

草叢の深きところに毒虫多く、大池の水底には名を知れぬ魚介の自然に湧き出る諺、曉の鴉の啼かぬ日はありとも入相の釣鐘一個が賣れぬ日もなしといふ、その江戸繁昌

の全盛に蒸されて浮塵子の如く、何を身過の業もなく住む家もなく連れ添ふ妻子もなき毛脛一本の生涯を捨鉢の金看板として、まッ直な市中の大道に心の横車を押し歩く無頼の曲物あり、

わけて元祿の華奢風流より絞り出され寶永正徳の寛活伊達に吐き出されし人間の屑、夜は酒色の巷に巣を構へ網を張ッて戀路に泥足を踏ん込みつゝ自己の腹を肥し、晝は市中の繁華雑踏を漁り歩いて喧嘩口論の押賣に金錢を貪り、加之も絶えず世間の風聞に耳を欹て目を剝いて、もし一杯の酒になると思へば石地藏の胸倉も捻ぢ切るほどの奴等、もし眼前の利慾に誘へば鬼でも蛇でも相手に取ッて組み付かうとの生命不知、をり〳〵利鎌の草を刈るに等しく召捕られながら、土の根のあるかぎり忽ち雑草の生ひ繁るが如く伸びて人の往來を塞げば、誰いふとなき江戸の昔を其まゝに名ばかり優しく、武藏野組とぞ稱べぬ、

されば武藏野組に名を得たるもの、またいづれも秋の草葉に因みて、萩の與右衞門といひ桔梗の五郎八といひ尾花の勘太に女郎花の定六、黄菊の總太さては白菊の門兵衞、なくて叶はぬ千草の生命こゝに露の谷五郎といへるは此奴この武藏野組の根を肥す頭領分、わけて優しき風情の名を持ちながら、情の雫もなき六尺の大力に猪毛の逆立ちし大男、ぬッと現はれし體は人臭き匂ひを嗅いで這ひ出でたる鬼に等し、武藏野組の重立ちし奴等三四人、いづこよりか鳥越の地獄橋に落ち合うて、向坂甚内が名に殘る四十年來の空屋を今そのまゝの假の宿、浮世小太郎が住家の軒に窺ひ寄りつゝ、加之も日本晴れの白晝ながら入口の閉せるに思はず顔を見合せて眉を顰めしが一人の身輕き奴、幸ひ椎の樹を攀ぢて小枝の端より窓を差覗きぬ、

「や、居るぞ、居るぞ」

かくと聞くや否、軒下に立ちし三人、等しく拳を揃へて戸を叩きぬ、

「あけた、あけた、佛のやうな男が涙まじりの慈悲深い談話に來たぞ、叩き割られぬ前こゝ開けた」

月なき闇の武藏野組に名ばかり優しき手脛の荒男四人、白晝の戸を叩いて臟腑の腐りし濁聲を張り上げながら、佛のやうな男が涙まじりの慈悲深い談話に來たぞと叫ぶ聲、飢ゑたる鬼の喚くに似たり、

主人の浮世小太郎は晝餐の土鍋飯に腹を肥して、また其まゝ前夜の寢足らぬ夢を結ばんと眉を枕に横はりし折しも、この物音に思はず耳を欹てゝ眉を顰めながら、さて自己の身にさへ用なき時は白晝に入口の戸を開けぬほどの男、まして人の訪ひ來る筈もなき不吉の名に高き我家を割るゝばかりに打ち叩くは、いづれ大道の中央を歩いて來ぬ奴等と、やう〳〵身を起せど柱に脊を凭せしまゝの大胡座、これが抹香臭き中より

念佛唱へて人となりし還俗坊とは見えず、加之も聲まで年齢には似合はず自然の膽魂を帶びて太し、

「はて、暴風雨もない此日和に何處から吹き付けられた奴等か、騷がしいぞ晝寢の耳觸りぢや、靜肅にせい」

「や、吐すぞ此奴、あばら屋の板戸一枚蹴破ッて踏み込まれぬうちが生命ぢや、他事でない汝のため、這ひ寄ッて開けい」

主人の小太郎、さては此ごろ市中の噂に聞き及ぶ無宿の曲物、白晝を喧嘩腰に押し歩いて他の弱身に祟る厄病神と思へど、ひけば其まゝ開くべき入口の戸を狼狽へて叩くほどの根性骨、五體の血の氣が素頭の天邊に蒸上ッて胴魂の落着かぬ奴等と、絲目の切れし奴凧の軒端にかゝりし心地、身も動かさで笑ふ聲のみ漏らしぬ、

「椎木の化物小屋と呼び傳へた四十年來の此空屋に住み込んで、また天井の蜘蛛の巣

も取らず其まゝ喰ふと寢る外に用のない獨身者ぢや、入口に鍵も紐もあらうか白痴め、はゝゝゝ」

きくや否、ばたりと入口の戸を踏み外して土足のまゝ込み入りし四人、いづれも母の胎内より生れ出でたる人相を失うて骨節の荒立ちし色まッ黑の大男、中にも面に鎌髯を作ッて眞向額口の毛際に闇夜の稻妻を欺く古疵の薄赤き奴、じろ〳〵四邊を見廻しながら三人を背後に從へて底光りの物凄き眼光、柱に脊を持たせしまゝ身動きもせぬ小太郎を睨んで、夜具の袖に等しき脣端を飜しつゝ街道の嵐に吹かるゝ荷馬の如き齒脛を現はしぬ、

「この江戸に住んで息の根の通ふからは、武藏野組に草の葉を肥す露の谷五郎といふもの、面は知らずとも名は聞き及ぶ筈、道路の通りがけに澁茶一杯を飲みには來ぬぞ、その男が今日わざ〳〵こゝへの用ぢや」

うてば響く人間の急所どこにあるやら、小太郎いよ〳〵無言のまゝ木像に等しき體、たゞ荒き鼻息に眼前の塵埃を吹き飛ばすが如く、ふゝと笑ひぬ、

元の浮世に生れし種を問へば高野一山の僧侶、いづれも何の某といふ親兄弟の氏素性ある中に、どこの馬の骨か牛の皮か臍の緒の知れぬ學文路宿の捨子より明王院の新發智に拾ひ上げられし十六の身を以て、傳へ聞く天狗魔王も立寄り得ざる開山壇上の靈跡を自己の剛と心得つゝ加之も三日の放溜に千年未曾有の大惡戲をせしほどの大膽もの、これぞ世諺にいふ糞度胸が猶更ら還俗の今こゝに膽魂いよ〳〵圖太くなりて、入らぬ生命を冷飯草履の如く持て餘せし男の目より、高が其日の酒色を漁る泥鼠に等しき奴等、いかに毛脛を踊らしながら飛べばとて跳ね出せばとて何の絲瓜と見るべき、おもはず鼻頭に小皺を寄せて冷笑ひぬ、

「や、武藏野組とは名詮自稱、むさい草叢の中より湧いて出た虫けら奴、その根を肥す露の某とは猶更ら白晝に出られぬ筈の奴、この家を何と見違うて來た、藪蚊が石地藏の頭を刺して生血を吸ひ出すとも、おのれ等が狼狽へた泥脛にかけられたる犬猫の死骸は持たぬぞ、はゝゝゝさりとて可惜ら五體に調子づいて動き始めた奴等、そのまゝ手持無沙汰に追ひ歸すも異なもの、幸ひ四十年來の空屋へ箒一本の用意もなうて住み込んだ男ぢや、天井裏の蜘蛛の巣でも掃うて歸れ」

元來うまれついての大膽不敵を人間無常の境に育ちて、加之も幼少より山の嵐に伴ひつゝ朝夕の讀經念佛に馴れたる自然の音吐、朗々として淀みなく澄み渡る聲に何とやら小耳の底を穿たるゝ心地、流石の荒男四人おもはず互に顏を見合せながら、黑闇に海鼠を踏み付けしが如く、うす氣味わるげに身を縮めし體を見るや否、寸隙もあらせず疊みかけての嘲弄一番、手鞠に取ッて宙に拋げ上ぐるが如し、

「とはいふものゝ四人、いづれも人に勝れし骨格、丸裸のまゝ大道の切賣にしても世間普通より少しは價のある筈、わけて額に向疵の一歩出張ッた色まッ黑な奴、露か雫か知らねど、何を喰うてやら五體に膏ぎッた鎌髯の面魂、さのみの捨物でもないぞ、但し度胸と智慧は網目のやうに見え透いて足らぬ勝の體が憫然ぢや、幸ひ有り餘ッて夜な〳〵噴き出す膽魂の削り屑と才覺の切れッ端に遣り場もない男、近う寄れ、くれてやるぞ、なれど一時に拾ひ込ンでは五臟六腑に溢れて氣が狂ひ出さうも知れぬ、はッはッはッはッ」

平生は鬼でも蛇でも捻ぢ伏せて組み付くべきほどの奴等ながら、たゞ呆れて驚いて、ほッと其顏を打守りしまゝ、生肝を引抜かれし夢の覺際に似たり、

人の向脛に喰ひ附く狂犬さへ、足音に尾を卷いて遁げ出すほどの奴等四人が、江戸市

中を踏み荒せし泥の毛脛を揃へて躍り込みし不意の面前に五體の指頭も動かさず、のッしりと大胡座のまゝ悠然と柱に脊を凭せて木像に等しき口より、嚙んで吐き出す如くに罵り笑ひし不敵さ大膽さ、あまり人間の調子を外れし胴膽の圖太さに、何とやら襟首の急所を針もて刺さるゝ心地、おもはず盆の窪に徹へて總身を縮めぬ、

わけて向疵に鎌髯を作りし露の谷五郎、のさばり返りし六尺の腰を次第に屈めて猪毛の兩腕を自己が膝頭に突き立てながら、さも訝かしげに小太郎の面體、じッと額越に打守りぬ、

「見た目は五尺の上を三四寸の小男、加之も今年やう〳〵取ッて二十五六の若輩、この腕と脛に組んで蹴飛ばせば芋殼を叩き折るより易い業ながら、その顋の動き工合と生膽の据り鹽梅に小面の憎さが餘り返ッて惚れ込ンだ、第一どこに不自由のない江戸市中を、わざ〳〵人氣の絶えた四十年來の此空屋へ住まれた」

小太郎、なほも床板に根を持ちしが如く、杜に倚りし大胡座の居座を其まゝの體、只ぎろりと光りし眼に冷かなる笑を浮べて、觀法の定座に這ひ寄る蟲を見るが如し、

「とても度し難い奴と思ひの外、河原の小石にも自然の性根ある諺、どこやら五體の片隅に人間らしい匂ひが出て來たぞ、は、ゝゝ如何にも身長五尺三寸、とる年は二十四の若輩、先祖傳來の血を受けた氏素性はあれど世間の人交際が面倒さに態と當り觸らぬ浮世を其まゝの苗字、名を持ッて生れた膽魂の割合に聊か遠慮氣味の小太郎といふ一本立、こゝが昔の怨靈を殘した不吉の家か人氣の絶えた四十年來の空屋か、我には詮議の用ない事、たゞ市中には珍らしい椎の大木に晝寢の夢を誘ふ枕の涼しさ、雨にも風にも窓うつ音の面白さ、わけて月漏る夜半の風情を嘸やと思うて住み込んだばかりの男ぢや、さるを何の不審あッて無法の泥脛踏ン込ンだ、きけば武藏野組に草の葉の根を肥す露とか雫とかいふ奴、消えて無くならぬうち今日こゝ

へ呑ンで來た濁りを吐いて仕舞へ」

露の谷五郎、おのれが引連れし三人を見返りながら、俄に聲を潛めて戸外の方を指さしぬ、

「ちと味のある相手ぢや、この入口の戸を建て直して歸れ、煮るか燒くか生づくりか、あとの料理は手に馴れた乃公の庖丁加減」

同じ穴より引連れし三人を追ひ歸しながら、まだ消えやらぬ露の谷五郎一人あとに殘りし身を屈め腰を折りつゝ俄に額越の慇懃さ、鐵柱を卷いて齒の立たざりし毒蛇に等し、

「百萬の甍に織るが如き繁華雜踏の中央を、人なき昔の野原と心得て武藏野組といふ一味同體七十餘人の中に、いのちの露と呼ばるゝ男、三十八の今この年まで向けた

毛脛と出る息を退いた事なく、いかなる敵でも關でも押し通して其場の腕節に埒をあけて來たが、およそ貴方ほど的の外れた薄氣味わるい急所の知れぬ相手に出逢うたは今日こゝに初對面」

「はゝゝゝさのみ變ッたところもない筈の我を、三十八の今日こゝに始めて出逢うた急所の知れぬ相手とは、取も直さず人の内兜を覗うて急所を衝きに來た奴、折角の的を外して歸すも氣の毒ぢや、あらためて念のため衝き直して見い、下手な鐵砲も數うてば中る諺、怪我の功名あらうも知れぬぞ」

「中るか中らぬか、さらば下手な鐵砲を打ち出して見よう、實は覗うて來た的が二個、その一個は貴方の一身、住む家に事を缺いて、橋の名にまで殘る向坂甚内が最後の怨靈を封じ込ンだといふ、その怖ろしさに人氣も立寄らぬ四十年來の此空屋へ、わざわざ生若い獨身で住み込むには、いづれ味な一物なうて叶はぬ筈の素性來歴を探

りに來たが、こりや今いはれた通りの事、なるほど市中に稀な椎の木の風流からと聞いて置かう」

「二個といへば其外に一個、まだ覘うて來た的のある筈」

「その他に餘した一個の鐵砲玉、ずどンと打ち込めば背後の襖を貫いて隱れた怪我人ないとは言はれまい」

「はゝゝゝ寢惚面に何を狼狽へたか此奴、思うても見い、四十年の蜘蛛の巣に閉ぢられたまゝの荒屋、やう〳〵近來この身が住み込ンだ土鍋飯の匂ひに、そろ〳〵一二疋の鼠が出たばかりの事、鐵砲玉は偖置き、床下に地雷火を伏せても人臭い生物は居らぬぞ、というて退ける筈ながら實は一人、いかにも居るに相違ない、ちと仔細あッて此ごろ大切な客人、それを汝が何の入らざる的に覘うて來た、たとひ人を殺して遁げ込ンだ兇狀を持つとも、この浮世小太郎が隱匿うた上は、あの反故張の襖一重

を鐵壁の扉、はゝゝゝその破れ目から隙間漏る風は通うても他人の脛は踏ン込ませぬぞ」

「いや、始めは鐵壁でも石櫃でも、みごと踏み割ッて正體を引摺り出す氣で來たが、あまり出來過ぎた貴方の男振に惚れ込んで我を折ッた今更、もはや其事は偖置いて、隨分また時と場合の味方にもなる氣」

「敵でも味方でも勝手次第の業ながら、絞り取る金銀の的もない家へ當座の酒料も覺束ない事で、わざ〳〵四人の脛を揃へて來ようの道理のない面相、じたい何のために、どこから誰に腹を肥されて、あの客人を覘ひに來た」

「實を吐けば白金の別當所」

「むゝ白金の別當とは聞き及ぶ高野山の關東詰所、歴とした宗門の格式もあり地頭としての權威もあり、もし召捕るほどの罪人ならば奉行所の手を借るべきに、市中を

踏み荒す武藏野組とやら、いはゞ無賴の荒男を内密に、はて不思議な事」

「いや、白金の別當に限らず、毒も時には藥になる諺、世間へ憚る仔細あッて其手に荒立てず相手を踏み潰す事には、をり〳〵賴まれる武藏野組の片職業、はゝゝゝ」

きのふは鳥越の地獄橋なる浮世小太郎の宿へ思はぬ不意の泥脛を踏ん込んで餌食を覘ふ毒蛇の如くに蟠りし奴、いかに何として一夜のうちに斯くも右左の寢返りを打ちしか、今日は白金の別當所へ押し込んで嚴めしき大玄關の中央に猿の如き臀を叩きながら大胡座を搔いて喚き立てぬ、

加之も懷中より小判三枚、がらりと式臺へ拋げ捨てゝ、おもはず取圍む寺中の役僧七八人の呆れ顏を睨み廻しながら、四邊に鳴り響く破鐘の如き大聲、

「こゝを死に損ひの爺婆が念佛寺と思うたに、きけば弘法大師の靈場で日本一の根を

生した大本山、いかな水無月の日照にも諸國から雨の降るやうに落ちて來る祈禱料の外、二萬八千石といふ領分を持ッた紀州高野の出張所、關東一切の利益口を占めた白金の別當とは知らずに賴まれたぞ、相手次第で竹を削ッた茶杓一本が百兩もする世の中に、その千年の深い礎を掘り起さうとするほどの物凄い奴へ差向けられた男一疋、小判三枚で濟むとは何處から割り出した時の相場ぢや、今こゝへ拋げ出して返す以上、あらためての禮を受けに來た、あの地獄橋の隱れ家に身を忍ぶ奴は、高野領で島野村の戸谷新右衞門といふ百姓、五十二箇村の膏血を絞られて天下禁制の讃岐桝を證據として此江戸へ生命がけの訴訟に來たとは、これも始めて聞いて猶更ら骨折賃の大不足に來たぞ、なるほど佛のあるところに鬼の棲む諺、まして毒を藥に内々そッと武藏野組の荒療治を施さうとする御坊達ぢや、衣の袖に油斷して望み通りに相手を踏み潰した後では談話にならぬ、賴まれた彼奴は確固に動けぬ穴へ

落して置いた、まづ千兩箱一個この身體へ脊負はしてくれ、ちと廉いが味な仕事のない折柄、その金と引換に藁小屋の底へ舞ひ込ンだ火の粉のやうな戸谷新右衛門を半殺しで渡さう、もし今更ら公儀の耳目を憚り世間の沙汰を恐れて此男へ賴ンだ覺えないと言はゞ言へ、慈悲の涙を看板に生盜賊の賣僧どもが天下禁制の讃岐桝へ加之も底を深くし松膠を塗り立てゝ無法の年貢を取立てた事、この江戸市中へ喚き散らして歩くぞよ、いはゝ的に覘うた戸谷新右衛門を取遁しても、こゝまで事の仔細を知ッた此男の舌一枚、千兩に買うて損のない筈、暴風雨の吹き込ンだ西瓜畑の坊主頭、うろ〳〵狼狽へずに返答せい」

わづか小判三枚に毛脛を飛ばして相手かまはず踏み込むほどの奴、逆に捻ッて千兩箱に身を翻せば、火中の中にも五體を持ち込む勢ひ、白金別當の大玄關へ大の字となりぬ、

生きて再び故郷の空へ歸らぬ念力に妻子の寢首を搔いて出奔せしのみか、非人乞食の姿に窶しても東海道へ追手をかけられしほどの戸谷新右衛門、いづれ高野の本山より白金の別當へ内通ありて、例の三人が前非後悔の體に歸國せし上は殘る一人の的となりて猶更ら嚴しく付け覘はるゝ筈とは思へど、いかにして斯くまで深き隱れ家を探り當てしか、

加之も證據の讃岐桝ありと知りてか、流石に公儀の耳目を恐れ世間の沙汰を憚りて平生の手を下さず、わざと緣なき案外の武藏野組を不意の喧嘩腰に差向けしは、事を荒立てずに人の氣付かぬうち根を絶ち切らんとの策謀、あり〳〵手に取るが如きのみか、正しく其奴の口より聞きし上は、また如何なる品を換へて襲ひ來るやら、いよ〳〵寸分の油斷もなり難し、されど毒を以て毒を制する世の諺、その蛇蝎の口を却ッて幸ひ

の逆に向はせつゝ、白金の別當へ追ひ込みし眼前の一策は得ながらも、また後の一策このまゝは濟まぬ筈と木像の如く動かぬ小太郎が戸谷新右衛門に對うて思はず眉を顰めぬ、

「委細は襖を隔てゝ聞く通りの奴が、不意に毛脛を踏み込んで來た折柄、もはや油斷大敵、第一あの露とか雫とかいふ奴、がらりと男らし氣に胸を割ッて泥を吐いたものゝ、根が取るに足らざる無宿の溢れ氣狂また其時の風次第に吹かれて何となるやら雲行の定まらぬ下司根性に、うかと肌を許すは智慧のない業、後悔の基、寸善尺魔の世の中ぢや、後ともいはず今のうち此家を立退く分別、それには兼ての用意、こりや我ために恩義の底知れぬ深い穴、また今後の萬事に就いても無類の力草にならう筈の身分」

戸谷新右衛門、疊に額を摺り付けて佛神の如く伏し拜みぬ、

「四里四方の江戸中に、たゞ御一人の貴方樣、今更ら無用の多言は恐縮、其お言葉に甘へて此まゝ」

「いや、實は今日の事なくとも、その恩人の許へ内々そッと打ち明けて訴訟の近道を聞かうとした折柄、幸ひ本人を引連れて委細を頼めば、何の爲す業もなうて可惜ら浮世に拗ねて出た氣まゝものゝ我ために、平生無沙汰の申譯、おもひもよらぬ手土産になるべき事なれど、斯る時は猶更ら途中萬一の用心、夜に入ッて後」

「いかな御緣でやら、重ねゞ斯くまでの思召、高野領の子々孫々に傳へて五十二箇村の氏神樣と心得ます」

「はゝゝゝこの氏神、他の子々孫々は偖置いて、ちと空腹になりかけた、土鍋飯でも供へて腹を肥さうぞ、はや、夕餐時刻に近づいて來た」

すぎし昔を憾まねど、現在うみの父なる飯尾作左衛門には二歳の曉に捨てられて、もし還俗せずば生涯また夢にも逢はで濟むべき筈の小太郎、

されど一滴の血筋もなき高田左門には却ッて深き自然の緣ありて、そも〳〵山を追はるゝ時に助けられし根來の頼覺坊とは肉身の同胞といひ、この江戸に兄と頼みし大泉周左衛門を失ひ勘治平にも別れし後は、一入の愛に養はれて子に貰はれしほどの恩義といひ、今かく我まゝ三昧の浮世に流れ出でて情の露に反きながらも、なほ月に一度づつ呼び寄せて顔を見ずば心に濟まぬ體、小太郎また生みの父には憚る事あれど、この高田左門には善惡を打ち明けて何の隔意もなきのみか、四季の衣服より人知れぬ米鹽の料まで内々そッと送らるゝ不思議の因緣、その高田左門が鳥越よりと聞くや否、をりしも燈下に書見の身を振り返りて、はや滿面に溢るゝばかりの微笑を浮べながら、入り來る小太郎の姿に思はず居坐を乘り出しぬ、

「や、來たか、これへ〳〵、このほどは暫く逢はいでの、はゝゝゝ夕餐を認めたか、平生に獨身は不自由もあらう、好みの馳走して取らさうか、さて今日に限ッて夜分に來たは、ゆる〳〵寢物語でもする氣でな、はゝゝゝ」

「小太郎め、只今の身のほどを憚りまして、わざと月に一度づつ御機嫌を伺ふだけの外、みだりに推參、わけて夜分を謹み居りましたところ、聊か異な事で、急に差迫ッた儀が」

「何、急に差迫ッた儀で來たとか、じたい如何な事ぢや」

「は、實は小太郎め、近來、うかと自己の身に餘る重荷を脊負ひ込みまして」

「むゝ身に餘る重荷とは」

「この身に餘るばかりではなく、あの住家にも差置き兼ねまする厄介の大荷物、それが盗人に覘はれまして、もはや一時の油斷もならず防禦も付かぬ苦しまぎれ、暫時

お預りを願はうため」

「はて何の品ぢや」

「今夜、そと召連れまして」

「むゝ生物か」

「汝には禁物との御叱咤も顧みず、高野一山の運命を桝の目に量り込みました領分の土百姓一人、あまり性根の美事さに小太郎め、思はず釣り込まれて退くに退けぬ只今の成行、もはや其奴に一命くれずば男の立ちかねまする儀で」

「や、また事を仕出來したな」

「は、は、但し仕出來しの仕終焉と心得まする」

書見の小机を押遣り燈火を掻き立てゝ、自己が生み落せし實子の一大事に逢へるが如く、腕を組みつゝ眉を顰めし高田左門の前に、ふしぎの縁の小太郎また父に對うて生涯の最後を告ぐるが如く、おもはず膝を進めて額越の目を剝き出しぬ、

「千年の靈跡として隨喜渇仰の涙に見上げらるゝ現世の極樂淨土、その高野一山の頂上が淺ましき末世貪慾の生地獄となッて、浮世の沙汰に放れし政道外の寺格を僥倖、猶更ら鬼畜に等しい惡僧どもが二萬四千石の外に日夜領民の膏血を絞り取る年々の無慈悲さ、いかな虐政を施す武家支配の聚斂妄吏も及ばざるほどの體、まして年貢租稅に天下禁制の讃岐桝を用ふるのみか、その桝の底を深くし松膠を盛り上げて寺領の農民に生血のあらんかぎり、子々孫々の末までも過當不正の粒々辛苦を生命と交換の横道無慙に吸ひ上ぐる折柄、こゝに一人の顏色青ざめし土百姓、泣きながら鋤鍬を持つ外に手足もないかと思ひの外、その二郡五十二箇村の犧牲となッて、加之も暴政惡虐の下に何れ遁れぬ恩愛の妻子を絞め殺して、はる〳〵一身を此江戸へ

死骨抛げ出しの出訴するものありとすれば、事の成否は偖置き、その者を何と思召されまするや」

高田左門、組みし兩腕を我知らず膝上に解き落して、小太郎の顔、じッと見詰めぬ、

「さては、その者を脊負ひ込ンで、また高野一山を敵手に取り直す心體か」

小太郎、鯨骨を折るが如く首肯いて、跳ね上げし面體に何とやら堂様の凄みを帶びぬ、

「あらためて敵手に取り直すかとは、聊か御不足を申し上げたき事、こりや宥觀の昔おのれが悪戯に山を汚して追ひ出されし遺恨でなく、佛神も照覽あれ、その後は一切さらに何の念も殘さぬ今この小太郎が身に取ッての事、申さば十六年目に始めて名乘り合ひし生父の言葉も半は反故と致せし不所存もの、第一また不思議の御恩に現在かくまで深く厚き思召の端にさへ身を置かで、折角の運の叶うた武士ともならず太平の世に安樂な町人ともならず、たゞ我まゝ勝手の浮世に飛び出して一身を市

井の巷に持ち崩せしほどの小太郎め、元來あッて用なき無益の生命一個、さて何をがなと今更ら後悔の使ひ道に捨どころ當惑の折柄、かゝる得難き義人に出逢ひましたるは全く以て思はぬ不意の幸福、また高野に拾はれ高野に育ちて高野を追はれし還俗の後その高野に對うて生涯最後の肝血を注ぎまする事、一旦は俗界に出でたれど自然の因果、此身いまだ佛縁に放れぬ大師の冥加に預ッて、末世末法の一山に蟠る鬼畜の悪僧原を掃ひ清むべき權化に生れましたかとの一念、何とやら身に染々と感應いたしまする心地、あの義人は取も直さず、祖廟より賜はりし示現の御使かと存じまする、は、は、その義人は高野領二十五箇村中にて島野村の戸谷新右衞門と申すもの、實は只今お玄關まで召連れて待たせ居りまする」

茶椀の片割も三年の後は用に立つべき諺あれど、うまれて二十四の今日まで何の用な

き無益の生命一個、これほど身に取ッて幸福の捨てどころなしといふ小太郎の一言に、高田左門おもはず其顔を打守りしが、やがて靜に首肯きぬ、

「なるほど高野に拾はれ高野に育ちて高野を追はれし還俗の後、その高野に對うて生涯最後の肝血を注ぐとは、いかにも始終の佛縁に離れぬ自然の因果、祖廟大師の冥加に叶うて末世末法の一山を掃ひ清むべき權化に生れ出でたりとは、武士の種に生れ武士の恩に養はれて、天晴れ無類の武士となるよりも猶更ら以て大きいぞ、今更ら思へば何とやら不思議に恐ろしげの運命、あの浮世に行末の兄と頼みし大泉周左衛門を不意の非業に失うたも、その身にとッて仇を報いし彼の勘治平の獄門首も、今こゝに高野領の犠牲となる義人のため斯くなれとの事か、もはや生の父の飯尾殿いかに言はるゝとも一旦その身を貰ひ受けた高田左門が許すぞ、捨身の念力大願、その義人を助けて生膽の黒血を吐き出すまで、退くな撓むな、たとひ火にせよ水にせ

よ鐵壁にせよ脇目も觸らぬ驀地の眞一文字に向うて飛び込め、蔭ながら守るぞよ、及ぶかぎりの力になるぞよ、たゞ我まゝ三昧に可惜ら身を持ち崩して生涯の定業なき浮世男になり果つるかと思ひの外、さりとは知らざりし佛界の所縁に生れ出た不敵の大物師、一日たりとも此の高田左門が子としては親冥利、もし不運の半途に倒るゝ骨あらば他人にかけず拾ふぞよ」

小太郎、おもはず俯して男泣の涙もろとも膝を進めぬ、

「山を追はれて此の浮世に出まする時は、不思議に御同胞とも存ぜず根來の頼覺坊に見送られ、今また此の浮世を去ッて捨身の一念を山に注ぎまする時、かくまでの御恩に送り返さるゝとは、まことに前後一聯の因縁、この一身の進退生死に取ッて金剛磐石の如くに心得まする、つきましては重ねての御願望ながら只今、申し上げまするる島野村の戸谷新右衛門儀、ちと仔細あッて鳥越の住宅には、あまりに要害淺

きの折柄」

「や、たしかに引受けた」

「せめて暫時こゝ一月あまりの間、そのうちには小太郎め、本國高野の水上へ瀨踏みのため、まづ白金の別當所へ聊か足の指頭を差入れまする心體」

「むゝ委細は後刻に改めて聞かう、兎も角も、その玄關に待たせ置く戸谷新右衞門とやら、これへ」

「は、は」

「五十二箇村中より只一人それほどの男、わけて汝が生身を賭けての鑑定、片田舍の百姓ながらも、天晴れ初念の動く奴では無からうの」

「御念に及びませぬ事、もし萬一、萬々一ものゝ途中に脛腰の怪しい節は、相手の高野一山よりも先づ此奴を生けて置かぬ覺悟」

我ながら今こゝに始めて我身の重きを自然に感應し得たる心地、そも〳〵高野の麓に捨てられて明王院に拾ひあげられしも佛緣の業、たゞ何の氣もなく一時の惡戯に千年の壇上を汚せしも、思へば末世一山の夢を破りし方便に叶ひしか、さればこそ十六歳の新發意が寺領隨一の大力に番はれし生命を無事に保ちて、思はぬ不意の力草あの根來の賴覺坊に送り出され、この江戸に來りて還俗の行末を兄と賴みし大泉周左衞門さては勘治平にまで死に別るゝほどの不運に落ち込みながら、我一命は牢獄の鬼ともならで生の父に逢ひ恩義の父に養はれ、加之も其意に反いて武士ともならず町人ともならず定めなき浮世の塵に吹かるゝ我まゝの境涯いづこの里に流れ行くかと思ひの外、また元の高野に對うて二郡五十二箇村の犧牲となりし義人のため最後の肝血を注がんとは、不思議に離れぬ始終の因緣、正しく我に一山を掃き清むべき權化に生れたるか

と、小太郎こゝに猛然として額越の眼に天の一方を睨みあげし大信念、睡れる獅子の何をか覘うて斷崖の下より自己の臥床を動ぎ出すに似たり、

いはゞ天下政道の沙汰に外れし佛界不可思議の大魔窟を相手として猶更ら油斷大敵の折柄、わけて入らざる不意の横合より市井の巷を踏み荒す下司野郎の飛び込みし折柄、戸谷新右衛門を人知れず高田左門が許に預け置いて、其身は其まゝ只一人、また飄然として鳥越の堺に歸らんとての途上、夜は次第に深く仰げば雲に忍び貌なる春の月、ほッと朧氣に一入の風情を添へつゝ、強ひて進められし酒の香に微醉の面を音なき風に吹かるゝ心地よさ、ぶらりと和泉橋を渡りて薄墨の刷毛繪に似たる聖堂の森を見返りながら、靜けき屋敷町の武者窓に添ひ人影もなき神田川の河岸傳ひ、淺草見付の此方より茅町に入りて、はや鳥越橋に黑く鬱蒼たる椎の大木、その樹蔭に漏るゝ燈火もなき獨身の境涯、たゞ手探りに轉げ込んで夜の明けるまで寢るばかりの事と、今更ら

我身の氣樂さに微笑を含みながら近づけば、何とやら軒下に立てる人影、小太郎おもはず眉を顰めて、朧の月に猶更の木下闇を見透かしながら、立停りもせで其まゝ歩み寄りぬ、

「たとひ夜盜でも放火でも勝手次第の家ながら、さて住めば我家の軒に誰ぢや」

「いはれまするは主人殿か、一昨日こゝへの男、武藏野の露で」

「や、露か、春の朧月夜に椎の木の下露とは面白い、さて今ごろ何として來た、まづ這入れ、もはや打ち解けた馴染ぢや、はゝゝゝ」

白金の別當に慾の皮を絞られて我許へ毒汁を吐きに來た奴、また我手に絞り直して白金別當の大玄關へ一倍の毒を注ぎに遣ッた奴、その露の谷五郎が武藏野の根にも歸らず、わざ〳〵更け渡る夜の軒下に立ッて我を待ち受けしは、いづれ心の底に一物を重

ねて舞ひ戻ッた奴とは思へど、もはや戸谷新右衛門を人知れぬ穴に隠して、矢坪の的を外せし今は只これ一身どこに打たるゝ急所もなき小太郎、まして元來不敵の大悪戯者、そのまゝ我家に引き入れて燈火もなき眞黒闇に、こそ〳〵と自己まづ勝手覺えし臥房の方へ身を横へぬ、

「空に月はあッても春の朧夜、わけて白晝さへ薄闇い大木の樹蔭に射し入る窓は無し、今更火を點すも面倒な獨身の一軒屋ぢや、ちと始めての客には氣の毒ながら、汝は一度こゝへ來て加之も其時は恐ろしい眼球の光輝で家内を睨みまはした筈、心覺えの其處邊に這ひ上ッて夜の曉けるまで悠々と語れ、面は見ずとも聲は聞えるぞ、よし戸惑ひしても高が蜘蛛の巣にかゝるか鼠の糞に踏み辷るか、その他に仔細の無い家ぢや、はゝゝゝさて何の用で來た」

さらぬだに始めて同類四人の毛脛を踏み込みし時、何とやら薄氣味わるき片頬の笑渦

に漂はされて、加之も針もて臍の中央を刺さるゝが如く、きりゝと思はず腸に徹へしのみか、今また鼻を抓まれても對手の知れぬ眞黒闇に引き入れられ、こそ〳〵と自己ばかりが勝手次第の臥房に身を横へながら、さて何の用で來たとは流石の奴も穽坑に落ち込みし心地、おもはず手足に四邊を探りつゝ聲を知邊に這ひ寄りぬ、

「不夜城の全盛といふ江戸繁昌の今この市中に、四十年來の蜘蛛の巣も取らず鼠の糞も其まゝの荒屋で、猶更ら火の氣もない黒闇に生若い身空の獨寢とは、さて貴方ほど腹の蟲の居どころの違うた男は珍らしい、なれど今一人、あの客人どこに居らるる、これも死んだやうに物音のない人」

「はゝゝゝあの客人か、ありや何としても根が遠國の片田舎に育ッた土臭い百姓ぢや、きのふ汝等が不意に吐鳴り込ンだ其時の凄まじい猛勢で、あたら膽魂を消飛ばしたか我にも告げず今朝、何處へやら遁げ出した」

「や、遁げ出したとは」

「はゝゝゝ遁げ出したというて腑に落ちずば隱したぞ、さるところへ大切に送り屆けて隱したぞ、但し時節到來の曉には必ず自然に現はれて出る筈のもの、其時また汝等の世話にもなるだらうが、まづ當分は一切萬事この男が後を引き受けての對手ぢや、さて白金の別當へ寢返り打ッて乘り込ンだ今日の手柄談話それ聞きたい、地獄の釜の底でも物を握み出すほどの面魂に、あれまで打ち明けて委しう對手の弱身を吹き込ンだからは、まさか空手で歸るまい筈、千兩箱一個か、二個三個、づッしりと荷馬に着けて來たか、黑闇で目鼻の解けた嬉しい面が見えぬ、はッはッはッはッ」

東天の空に啼く鴉の一聲二聲、いつしか椎の樹の木葉を漏れて、ぽッと戸の隙間より

白く射し入る曉に、なほ薄闇き片隅を見れば主人の小太郎、着の身のまゝの大の字形に今更ら睡たげの體、寢返りの枕もろとも朦朧の半眼を横に轉じぬ、

「春の夜は明け易きもの、うとくとした半夜の轉び寢に何やら耳うるさう聞くうちはや戸の隙間が白うなッたぞ、さて前夜の結果は千兩箱の二個三個、荷馬の脊に積ンで來る筈の男が、たゞ相手の大玄關で吐鳴り散らしたばかりの事、わづか百兩の手付を取ッて殘餘の九百兩を我への進物にするとは、あの客人と引替に請取る約束の九百兩そのまゝ捨てた交換として、この小太郎の膽魂を武藏野組に貫ひたいとの事でがな、や、もとより入らぬ生命の捨場も無い身を、どこに面白い取得あッてか、それまでの執心、いはゞ男振を下げての依賴、いかにも嬉しいが、はゝゝゝゝまづ謝絕ぢや」

織るが如き白晝の大道を傍若無人に踏み荒して、親兄弟の死目にさへ滿足の通夜せし

事のない奴が、まッ暗闇の終夜ら殊勝氣に坐り込んで、平生の骨節を和らげつゝ說き付けし甲斐もなく、曉方の一言に跳ね飛ばされし呆れ顏、小太郎おもはず片手に半身を起して振り返りぬ、

「敵となるも味方となるも互に知らず知られぬよりは深い因緣、また人間の一生どこで何をして如何な境涯に暮すも同じ事、わけて奉公仕官の身でなし家庫繁昌の身でなし妻子眷族を背負うた身でなし、いはゞ生きて用ない捨物の身體、あッて詮ない無益の生命、なるほど聞き及ぶ噂の武藏野組には、さのみ遠くもない近所似寄の門口に出來た男ながら、さて心の奧座敷は案外の相違ぢや、その芳志を受けてからが此方に取ッて面白うない事、この男を引入れてからが其方に取ッて益のない事、こりや折角の談合なれど、まづ水と火の兩損ぢや、はゝゝゝゝ」

「や、してやられたぞ」

「何、異な事を聞く、してやられたとは今更ら白金へ立戻ッても此まゝ此處で居坐ッても、虻蜂取らずに可惜ら九百兩、うッかり無にしたとの事か、この男を買ひ損ねた曉は其場に交換にする筈の一物、あの客人を取り遁したとの事か、そりや汝の油斷ぢや、はゝゝゝゝ但し改めて出直すならば出直せ、白金の賣僧ばかりでは不足に思うた折柄、ついでながらの幸ひ一まとめに武藏野組も敵に受けて見るぞよ、なれど此男を敵手としては汝等の破滅、いはゞ暗劍殺の方角ぢや、こりや此まゝ當らず觸らず、そッと捨て置くが上分別、はゝゝゝゝ」

そのまゝごろりと身を横へて、肱を枕に脊を向けながらの獨言、

「五尺三寸、二十四の小男、まして斯うしたところは盲目も同じ事、人斬庖丁で突くも刺すも、今が手の中ぢや」

江戸の市街を北に出でて川一重の大橋を渡れば、世にいふ萬事お膝元を離れし奥州街道の足立郡内、その千住の入口に馬繼の立場茶屋とは浮世の葭簀張、人知れぬ奥は裏田甫に草屋根の軒深く、こゝに武藏野組の巣を構へて、日夜ごろ〳〵と毛脛を踏ん伸ばす頭分の奴等七八人、今夜も酒に喰ひ醉うて丸裸の車座に喚く體、出來損ひし大江山の繪卷物を見るが如し、

わけて其根を肥す露の谷五郎、茶椀酒の瀧呑に色づくばかりの大息を吹きながら火影より飛び込む膝の青蟲を叩き潰して吼ゆるが如く語り出しぬ、

「や、皆きけ、およそ世の中に不思議も不思議、あの鳥越の和郎ほど正體の得知れぬ胴骨の圖太い奴はないぞ、この腕節を眞正面に突き出せば、六道能化の石地藏でもみごと泣く音を絞ッて來る筈の男が、さて何としてやら氣が脫けて平生の我を折ッた」

「こりや頭領でもない脆い事、鐵でもなし石でもなし、きけば今年やう〳〵乳の氣の失せた二十四の小男、たとひ頭の天邊より足の爪頭まで膽魂が張り切ッて五體に寸隙ないにせよ、どこに元來それほどの不思議がある、文句も仔細も面倒もあるものか、其場で埒のあく筈、蹴ッても踏んでも濟む筈、もし其奴、去年の冬あの掃部宿で汁の實にした子狐の古親であるまいか」

「はゝゝゝ白痴め、狐狸の仕業なら捻り殺して黑燒にもするが、さて其奴、正しく人間で鬢の毛一筋も引拔けぬほど薄氣味の惡い奴、加之も呆れ返ッた大膽さは敵となッて踏み込ンだ此毛脛男を、そのまゝ白金の別當へ逆に追ひ使うて自己の用が濟めば木で鼻を括ッた挨拶、一言の禮は偖置き、そこに居るかとも吐さぬ小面の憎さ、うか〳〵すれば寢ながら足の踵で此髭面を逆撫でにしようも知れぬ筈、いかな空飛ぶ天狗も一度は驚いて梢に獅嚙み付くほどの大暴風に出喰はすとやら、この乃公も

始めて出逢うた生涯の語り草ぢや」

「や、平生の手柄談話と違うて、聞けば猶更ら嘘でもない筈、それほど不思議に出來た可惜ら男の膽魂を捨物にして、盲目も迷はぬ尋常の浮世を眞直に渡らすは、惜しいもの」

「そこに脱るか、いふまでもない事、呆れ返ッた果が思はず惚れ込ンで、この面白い浮世の裏道へ引き摺り込まうとした甲斐もなく、嚙ンで吐き出すやうに面を皺めて嫌ぢやと吐す」

「はて、過ぎた昔の武者本を讀み聞かされたでなし、現在の宿も人間も數の知れた一疋、そりや誰もあること頭領のために生涯一度の苦手ぢや、はゝゝなれど我々さう聞く上は此まゝの空耳で濟まぬぞ、いかな不思議の奴にせい斬れば痛い血の出る生身の敵手ぢや、第一それほど珍らしい奴の生膽を三盃酸にして呑み込みたい、さぞ根性魂が此上また丈夫にならう」

「久しう腕節が夜啼きして、幸ひ療治のしようもない折柄ぢや」

「もし大事を取れば夢うつゝの寢惚面に踏み込ンで、手足四本、首一個、五人がゝりで斬り放せば何の苦もない奴、はゝゝゝ」

象牙箸の先で小鰺の毛骨をせゝり出すといふ享保の江戸市中に、わづか千住の川一重を隔てて人間の生膽を三盃酸に喰はうとする奴ありとは、さても油斷のならぬ怖ろしの世の中、

その武藏野組の生命不知が五人、雨雲の月なき闇の夜を幸ひ、車座の茶椀酒に猶更の勢ひ込んで、彼奴ばかりはと押し止めし露の谷五郎が言葉も用ひず、そりや誰も生涯に一度あるべき頭領の苦手ぢや我等に天狗も魔物もあるものかと、おの〳〵大脇差の

寢双を脊門の藁蓆に磨ぎ合して鐵砲玉の如く飛び出しぬ、

千住の大橋より道路を斜めに山の宿の追分に立出で、花川戸の河岸傳ひに駒形堂の前まで行きし頃は、いつしか降り出せし小雨に往來の人影も絶えて、脊後に響く淺草寺の初夜の鐘、見渡す家々の軒端に窓漏る火影もなし、

「いよ〳〵近づいたぞ、この黒船町を御藏前に出て、つい一歩の其處が鳥越の地獄橋、椎の木の蔭が例の生膽ぢや」

「ぬかるな、あれほど堰かれた逆汐の中を八挺櫓のやうに押し切ッて來た五人、いかな暴風に逢うても此まゝの空船では歸れぬぞ」

「何の白痴め、知れた事、はゝゝゝ鐵でも石でも摑んで踏み碎く手足が二十本の五人、たッた一人の四本に向うて夢うつゝの寢込ぢや、まして人斬庖丁の手前、今更四の五のあるものか」

「や、面白い、これが時の流行風邪にも醫藥養生する世間の噂なら兎も角、鋸の齒でも引き切れぬ現在我等の親骨が柔かうなッて、肋骨の一二枚を舐められて來たほどの奴、猶更ら以て面白い近來の手料理ぢや」

「白晝雜踏の中央でも上面に割ッて通る身が近所合壁のない闇の夜の一軒屋、四邊に構はず押し込んで叩き伏せた上、半殺しにした奴を引き摺り出して生膽を抜き取れ、首のない胴殼はあるとも、この江戸全盛の市中に腹立割ッて、膽のない死骸の詮議沙汰を聞きたい、それこそ人間業とは吐すまい、はゝゝゝ」

いかにも人間業にあるまじき奴等五人、前後ちり〴〵に一人づつ鳥越の地獄橋に落ち合ひながら、闇夜の小雨に何をか額を鳩めて私語きし後、のそ〳〵と椎の樹蔭の軒下に立寄るや否、もとより鍵なき戸口一枚、そッと引開けつゝ五人もろとも先づ首のみ差入れて窺へば、例の燈火も無き眞ッ暗闇、たゞ獨寢の夢にや入りけん鼾として音

なし、

入口の戸に鍵もない大膽さ、夜の獨寢に燈火もない氣樂さ、たゞ雨露を凌ぐため屋の棟の下に身を横へるばかりの男と聞き及べば、そろりと引き開けて首差入れながら、まッ闇がりの音なき體に怪しみもせず、そのまゝ耳と耳との私語き合うて土足を踏み入れし武藏野組の五人、

もし遁げ出さばと大脇差を抜いて入口の戸際に立塞がりし奴一人、別に一人は柱に身を倚せながら、腰巾着より燧石と火奴を取出して紙燭の用意、さッと闇を破る火光一點に起しもやらず三方より蝗の如く飛び付いて組み伏せんと這ひ上りし奴三人、いかに油斷のならぬ世の中とはいへ、身に取らるゝ財寶なければ放火夜盜の恐れもなく、まして淋しき樹蔭の一軒屋ながらも江戸全盛の市中、人の生膽を盜みに來る奴ありとは、夢にも知らぬ夢の眞最中を覘ひ寄りし以上五人の曲者、

燧石の音、かち〳〵と響けば、おもはず總身の息を含んで力足を踏み占めし三人、ぷッと吹きうつす紙燭の火に闇を破るや否、大手を擴げて飛び付かんと睨み廻せし夜叉眼に敵の影なし、

されど奥の一室と、もはや四邊に憚らぬ荒男の毛脛、襖を蹴ッて飛び込めば、こゝにも敵の影なし、

されど片隅に敷き展べたるまゝの夜着と枕、箸と茶椀に土鍋飯の半を喰ひ餘して、もの、本を五六冊も取散らしたる體、もし氣取ッて脊門より遁げ出せしかと、裏口の戸際に立出でんとすれば、蜘蛛の巣に面を搦まれて腐りし板敷の間に足首ぐさと踏み入れぬ、

「や、此奴、こゝに住ンで以來、おのれの裏口を出た事ないぞ」

「戸袋、剛、どこも其處も藻脱の殻、腐蝕臭いが人臭うないぞ」
「なれど土鍋飯は宵に喰うた殘餘、濕り氣のある箸茶椀に徒然の讀本、こりや一夜の生命冥加に叶うて出た奴、そッと此まゝ忍んで曉方の歸りを待たうか」
「いや、空巣へ踏ン込んで前兆が悪いぞ、兎も角も引上げて二度目の夜討ぢや」
さらば今夜の證據を後に殘して覺らるゝなと、轉がる土瓶の置場まで元のまゝに取り直しつゝ、ぞろ〳〵と五人一時に立出でて、舌鼓もろとも曉けぬうちに走せ歸らんとすれば、をりしも小雨は霽れながら黑雲を洩るゝ星明りもなき地獄橋の上より、此方に對うて窺ふ如き人影ぽッと立ちぬ、

人の生膽を取ッて三盃酸に喰はうとするほどの奴が、五人もろとも毛脛を揃へて踏ん込みし甲斐もなく、蜘蛛の巣に面を撫でられしばかりの外、蚤一疋も得殺さで其まゝ

立出でし地獄橋の上に、星明りもなき雨雲の闇より此方に對うて窺ふ人影
さては彼奴、いづこよりか歸りしぞ、家の内の夢うつゝと違うて橋の上に油斷のない體、ぬかるな同士討するなと五人おの〳〵力足を踏めば、その人影おもはず動いて、
くす〳〵と笑ひぬ、
や、此奴、もはや生膽も死膽もなし、眞向より打ち込んで斬り刻めと氣早の一人まづ飛び込めば、から〳〵と高く笑ふ聲、
「狼狽へるな、白痴め、露ぢや」
「何、露、頭領か」
「あれほど止めは止めたが、さて押し切ッて出た上は同じ一本の元末ぢや、自然と引かれて蔭ながら後見に來たぞ、但し、して退けたか爲損じたか」
「や、生命冥加な奴、どこへ失せたか今夜は藻脱の殻ぢや」

「はて、知ッてか知らずか、何としても不思議に異な奴」
「何の不思議も仔細もあるものか、生物で出歩く奴が居らぬだけの事、いはゞ今夜だけの運に叶うた奴」
「いや、こりや敵手の運か汝等の運か、知れぬぞよ」
「はゝゝゝいかな事、あまり苦手が利き過ぎて、どうやら頭領の胴骨に臆病風の吹き入る穴が出來たぞ、その荒療治は我等の手にある事、また出直した上、あらためて不思議の講釈を聞かう」
「苦手が利き過ぎたの、胴骨に穴が明いたの療治をするのと、や吐すは此奴等、なれど憎氣のないが世にいふ互の汝か我かぢや、はゝゝゝもはや曉方に近いぞ、兎も角も引き上げて歸れ、この露は此處まで來たを幸ひの足ついでぢや、曉の鴉と共に東天の白金へ羽張たき込ンで、あるか無いか過日の喙みかけた餌坪へ二度の嘴を容れて見ようわ」
地獄橋の上に私語き合ひし五人と一人、歸る奴も行く奴も同じ草叢より這ひ出したる蛇蝎に等しく、のろ〳〵と雨夜の闇に紛れて別れ去りぬ、

春とはいへど梢の花も落ちて若葉の夏に近ければ、あけ易き空ながら前夜よりの雨雲に蔽はれつゝ、いつよりも遲き東天の空、やう〳〵薄く白みかゝりし頃まだ開かぬ白金別當の門前なる松林の切株に腰うちかけて、燧石の莨の煙ぽッと吹く男は露の谷五郎、まだしも塀を乘り越えて飛び入らぬだけが此奴の人間らしきところ、その名と共に案外の優しげなり、
をりしも朝ぼらけの空を仰ぎし髭顔の頰に豆の如き小石一個、いづこより飛び來ッてぽつりと中りぬ、

痛からねど思はず振り返ッて見廻せば、十間ばかりの彼方に編笠の男一人、またもや小石を拾うて再び抛げ出さんとする體に、がばと身を起して松を小盾の大喝一聲、

「や、其奴め」

たゞ一掴みに走り寄らんとすれば、彼方よりも歩み來りて編笠の端に手をかけつゝ半面を現はしぬ、

「鳥越の椎の樹蔭ぢや」

きくや否や、わけて今朝の心に徹へし露の谷五郎、はッと立停れば、ちか〳〵と身を擦り寄せて、さも馴れ〳〵しげに滿面の微笑を含みながら懷中の片手に山の如き肩口を輕く叩きぬ、

「この曉方に何として此處へ來たぞ、加之も寢恍面の大油斷、ちと用意めよ、いたづらの小石で僥倖もの、覘うた手裏劍ならば頰から頰への田樂串、鐵砲玉なりや生命

が無いぞ、はゝゝゝ」

はや一口に喰はれて、ぎゆうと奥齒に嚙み占められたる心地、絞り出すが如き苦しげの苦笑ひを鼻頭に浮べぬ、

「この別當所に取殘した用あッて、門の開くを待ち兼ねた折柄、じたい貴方また前夜いや今朝こゝへ何のため、いつごろ家を出られた」

「異な事を聞く奴、はゝゝゝもはや彼家には住まぬぞ、ありや昨日の朝を限りに立退いた、元の空屋ぢや、但し半歳越の寢起に蜘蛛の巣も掃はぬ男、猶更ら出る時の面倒さに着古した夜具も喰ひかけた土鍋飯も其まゝの置去にしたが、それとも知らずして狼狽へて立寄ッた奴があれば氣の毒、また物のある上は人も歸る筈との未練心で二度も三度も覘ひ寄る奴あれば重ね〳〵の笑止千萬、手數ながら歸途に殘した品品どこへか取り捨てゝ貰ひたい、日は淺うても汝とは馴染甲斐ぢや、欲しくば呉れ

るぞ、はゝゝゝゝ」

大口あいて曉の空に高笑ひの面體を、露の谷五郎おもはず眼を見張りつゝ、じッと打守りぬ、

たゞ何となく門前を彷徨いて、人知れぬ心の底の大事の緒を引出さんとする小太郎も、また門内の大玄關を眞一文字を吐鳴り込んで、自己が慾の皮を張り直さんとする露の谷五郎も、その白金別當の門は八文字に開きながら、今は却ッて此方なる葭簀茶屋の開くを待ち兼ねつゝ、幸ひ曉方の人なき奥の床几に腰うちかけて語り合ひぬ、

「や、かう無うて叶はぬ筈、いかな無法の横車を曳き出す悪黨でも、およそ人間に立てられて、物の頭になる奴は鬼の目にも涙の諺、無用の力業よりも骨に染み込む道理の早いが男ぢや、その頭の汝と見て取ればこそ、生爪一枚も大切にする今この

身で江戸市中を踏み荒す生命不知の武藏野組と知りながら、はゝゝゝゝあれほど嚙んで吐き出すやうな大膽に爲て退けたぞ、また平氣の我を折ッて其大膽を自己が懷中に買ひ込まうとしたは流石に汝ぢや、なれど流石の汝は汝たゞ一人その脚下に蛆蟲の如く湧いて蠢めく奴等は迚も度し難い人外の沙汰、こいつ却ッて面倒と思ふが否や、あの鳥越の家を遁げ出した藻脱の殼へ、果して前夜の闇に五人の珍客とは案に違はず、やれ危い事ぢや、はゝゝゝ」

「いはゞ同じ穴に棲んで親子兄弟に等しい奴が五人、いはゞ敵に取る筈の貴方を覘うて踏ン込ンだ前夜の事まで、かう打ち明けて語る男ぢや、加之も五人の影を追うて萬一の中垣にならうとまでした男ぢや、神以て眞實どこにも不思議の緣あるやら、嫌はるゝほど猶更ら貴方に惚れ込ンだ」

「さのみ身に取ッての差當る用もなく、また惚れ返すほど嬉しうも有難うも無けれど、

さて人は脆いもの、きけば憎うもないぞ、はゝゝゝ但し眞實そこまで、この男に惚れ込ンで何とする」

「何とする氣が無ければこそ、たゞ米の飯の食ひ飽かぬやうに惚れ込ンだ、もし惚れ込まずば生かすか殺すか二事に一事の敵手、どこに浮世の義理も仔細も」

「おもしろい、たゞ何とやら米の飯の食ひ飽かぬやうに好いたとは面白い、なれど元來の素性も氣心も得知れぬ昨日今日の此小男たゞ一人と、多年の惡緣に骨まで腐り繫いだ武藏野組と、もし秤量にかけて取るか捨てるかの重さ輕さ、いづれを摑むぞ」

「右、左、そりや貴方が口先の慰みか、また思ふ心に根があッての事か」

「その念の入れどころ、氣に徹へて男らしう聞えたぞ、いかにも返答次第で隨分、惚れ返さうも知れぬ事ぢや」

多年の惡緣に繫がれし武藏野組と、きのふ今日の氣心も得知れぬ此小男たゞ一人と、胸裡の秤量にかけて右左いづれが重いぞ、返答次第で惚れ返さうも知れぬといはれて露の谷五郎おもはず差俯きながら苦しげに額越の目色、

「この谷五郎、時と場合の怪我でも過失でも無うて、人を殺した數が十三度、入らざる喧嘩口論に敵手を不具に爲て退けた數は山ほど、無慈悲に絞り取ッた人の涙は深い海ほど、生命を的に浮世に爲たい三昧、ありだけの文盲を盡して毒蛇のやうに這ひ廻りながら、さて不思議に一日の牢屋飯も喰はず、また江戸市中を吹き荒した三年前の流行病にも取付かれず、この眞向額口に不意の斬疵一個所を受けた外は無事に今日まで娑婆を過した四十の曉、思へば積り積ッた惡運の末、もはや五體に餘ッて脊負ひ切れぬ罪の重さで脛腰の倒るゝ時節到來と兎の毛の未練氣なしに覺悟はしても、今が今、どこに死骨を曝して其罪の萬分の一に當るやら、あまり狼狽へて方角

を取失うた折柄、貴方といふ生涯こゝに始めて苦手に出逢うたが身の幸ひ、これを最後に死場所の指圖して貰はうためぢや、その死場所さへあらば浮世と共に武藏野組の暇乞、さも無うては今更ら退くに退かれぬ多年の惡縁で結び固めた外道の因果、また此上いかな人鬼になるやら」

「や、道理ぢや、それほどの罪を脊負ひながら今日まで脛腰達者の無事に生き伸びて來た奴、たゞ一口で埒のあく獄門首に梟けられただけでは差引勘定、ちと浮世に借り過ぎて冥途の旅心地が惡からう筈」

「そこへ貴方への談合、いや身に取ッて幸ひ指南にあづかりたい貴方ぢや、そもく、この白金の別當へ逆に捻ッて追ひ使はれた時、委しうは聞かぬが小耳に挿んだ高野一山を相手の訴訟沙汰、五十二箇村の犧牲に飛び出した島野村の戸谷新右衞門とやら、其邊に此奴の骨の捨場所あるまいか、あらば近頃の御無心ながら、少々その

穴を分けて貰ひたい」

「さて〳〵此奴め、どこまでも慾の皮の張り切ッた男ぢや、さほど罪業の重荷を脊負ひ込んだ極惡の死際に、今更ら人助けの善い事へ手足を入れたいとは、百貫の借金を古編笠一介で濟まさうとか、はゝゝゝなれど借り倒したまゝの無挨拶で行方も知れず遁げ出す奴よりは何とやら自然の根が優しいぞ、はゝゝゝ」

愁訴、歎願、駈込、駕籠訴、直訴、その他さまく公儀の役所役人に對うて罪の寃枉を訴へ事の黑白顚倒を歎き、また地頭領主の堪へ難き聚斂苛酷を泣訴するの道あるに似たれど、いはゆる天下取の武者風に吹き下さるゝ土百姓と素町人の悲しさ、御政道お慈悲といふは只その名を耳に聞くのみ、拳を擴げて風を捉ふるが如し、

わけて一片の書札に涙を注ぐ愁訴歎願は大海原の水底に小石を投げ入るゝが如く、さ

りとて大老若年寄などの權門を途上に覘ひつゝ駕籠訴すれば、行列の人數に手毬の如く跳ね飛ばされ蹴散らされて幸ひに氣絶もせざりし後、始めて邸内に召連れられ駕籠訴部屋といへる一室に幽閉せられ加之も其訴狀と共に本國の領主地頭に引き渡さるゝ外なく、また駈込とて寺社奉行勘定奉行などが登城出仕の間際を覘うて其玄關に一身を抛げ出しつゝ訴狀を差上ぐれば、幾度か權威に壓せられて屈せざるものを幸ひに只一應の糺問ありし後、取調中入牢申し付くるといふ大喝の下に二年三年、甚だしきは四年も五年も打ち捨て置かるゝのみか、別に越訴强訴の罪に處せられて十中の八九までは無念の涙を呑みながら徒らに牢死となりぬ、

さらに最後の一大事いよ〳〵直訴とて將軍家お成先を覘ひつゝ訴狀を差出すが如きは痴人の夢に等しき當時、さらぬ辻々の警固、道筋の嚴命、いづれも業を休み戸を閉ぢて大道に塵一本もなく門口に清めの盛砂をせし上、前日よりの沙汰に其日は一切の火

の氣を禁じ現在人間の露命を繫ぐ炊煙さへあぐるを得ざるのみか、上野の山には目に見えぬ蟲螻の這ひ寄るを防がんとて通行の兩側に樟腦の小土手を築きし事さへあるほどの中より、一人こゝに怪しき者の身を忍んで飛び出すべき筈なく、もし萬々一かゝる不敵の者ありとすれば、この訴狀は其まゝ取上げられて、ふしぎや訴人は半日のうちに頓死するぞと言ひ傳へぬ、

まして浮世の風に吹かれぬ千年の根を踏み固めつゝ加之も天下政道の沙汰にさへ動かされず、古來別格獨尊の領主地頭として道理の外に立てられし高野の一山を敵手に、その領民の土百姓たゞ一人が手足を伸ばして、疊一枚を出でざる五尺の肉身に正邪曲直を爭はんとするの道、たゞ夏虫の飛んで火に入るが如き以上の外になしとすれば、島野村の戸谷新右衞門なるもの、可憐いかなる身の果に終るべきか、

當時の寺社奉行として下總國關宿の城主五萬八千石、小唄にうたはるゝ久世三四郎の昔より世に聞えし名家の當主久世大和守、先代の一周忌に當りし其日の朝、丸山の菩提所本妙寺へ供養墓參のため、はや筋違橋の屋敷は大門の内外に供廻の人數みち〳〵て乘物を玄關の正面に押据ゑ、駕籠脇の諸士は左右に跪ぎつゝ、すゝ竹羅紗と白羅紗の二本道具は描けるが如く伊達奴の手に振り立てられぬ、

大和守、幅紗小袖に麻上下の折目正しく立出でて、はッと諸士一同の平伏せる頭上を靜に見渡しながら、今しも大玄關の式臺へ片脚を下せし時、いづこよりか飛鳥の如く眞一文字に驅け込んで門内の敷石に身を抛ぐるや否や高く叫びし一聲、

「御訴訟」

みれば遠國の百姓めいたる旅姿のまゝ大地に打ち伏して頭を砂に埋めながら、腕の附際より何物にか宙に吊らるゝ如く差上げし兩手に一通の訴狀を挿みぬ、

居竝びし徒士侍、おもはず前後左右より取圍んで、願の筋あらば訟所へ罷り出よ、御出先を遮らば狼藉者に落すぞ、退れ〳〵の聲もろとも引き摺り出さんとすれど、一念こゝに動かぬ體は大地に根を持つが如く、またもや高く叫びし一聲、

「御訴訟ッ」

叫ぶや否、そのまゝ玄關の駕籠脇に對うて這ひ寄らんとする勢ひ、や此奴いよ〳〵狼藉者と、四方よりの足蹴に踏み出さんとすれば、案外の骨太に捨身の大力さらに動かず驚かず、またもや高く叫びし一聲、

「御訴訟」

大和守、この體を打守りて暫時そのまゝ式臺に立ちしが、うたれながら蹴られながら屈せず撓まず、加之も打たるゝ毎に膝を進め、蹴らるゝ毎に身を這ひ出しつゝ、一度よりも二度よりも三度、いよ〳〵高く聲を張り上げて御訴訟々々々と叫びしは、いか

にも思ひ切ッたる體よく〳〵の願念、もとより身を捨てゝの事と、その額口を見透せば、果して大地に皮肉を摺り破りつゝ血汐を吹き出しぬ、

「兎も角も一應その願書を取上げて得させい、また其者は手當を遣はして留め置け、歸館の後あらためて取調べるぞ、ものども此まゝ遣れ」

久世大和守の立出でし後、邸内役所の番部屋に引き入れられて、まづ息切の水を與へられ敷石に摺り破りし額の疵も療治せられ、また其まゝ引き出されて下調を受け、やがて調所の入口より高縁の下に差廻されつゝ、そこに押据ゑらるゝや否や、左右に附添ひし下役の聲、

「頭をあげい」

はッと額越に見上ぐれば、正面に繼上下の重役一人と聞取の相役一人、縁端には書記

のもの筆を執りて斜めに見下しぬ、

「先刻の振舞、いかにも自己の身分を心得ぬ奴、じたい其方いづこの何物ぢや」

「紀州高野山の寺領分、島野村の百姓戸谷新右衞門と申しまする」

「紀州の高野領民が、いかなる仔細あッて、今日わざ〳〵江戸表お役向へ駈込の訴訟いたした」

「恐れながら委細の儀は、御願書に認めて差上げましたる通りの次第、高野山の寺領二郡五十二箇村の者ども、現在の民百姓は偖置き、もはや子々孫々の末々まで立行き兼ねまする年貢米、運上過當の難儀至極に付きまして」

「こりや待て、餘の義とは違ひ年貢運上の義に就いて彼是の訴訟は、そも〳〵天下の御法度、輕からぬ事ぢやぞ、たとひ如何やうの堪へ難き仔細あるに致せ、その地頭の民百姓として其地頭を差置き、お膝元の重き御役筋へ駈込の訴訟沙汰とは、猶更

ら以て容易ならぬ事ぢやぞ、幸ひ我等これにて内分下調べの間は格別の取扱ひを致して遣はす、定めて願意の趣には道理の次第もあらうが、公儀より其地頭に對うて御吟味もないに領民の其方たゞ一人、その地頭を相手取ッて迚も叶はぬ事ぢや、越訴強訴の罪科を蒙らぬうち、一日も早く此ま丶本國へ引取ッて、もし願ひの義あらば領民一同どこまでも地頭の役人に愁訴哀願いたすべきが道ぢや、神妙に訴狀を取下げて引取れ、引取れ、當御前には我々より申し上げてくれるぞ」

「重々の御意、有難く存じまする、但し一身を無きものに捨てましての事、これがためこの身いかやうの重き罪科を蒙りませうとも、固より覺悟の私儀、憚りながら偏に御家柄を慕ひ奉り、わけて當時また御役柄を仰ぎ奉りまして、身の分際も辨へず眞一文字に御當家樣へ駈込訴訟の者、あはれ訴狀あのま丶御取上のほどを願ひ上げまする」

「や、さて〳〵強情の者ぢや、まして高野山は外々と違ひ、いはゞ御政道の御扱ひに格別の義を差許さるゝやう聞き及べば、猶更ら身のためを思うて我等これほど說き聞かすに、達て上の御手數を煩はす存念か、いよ〳〵引取らぬと申すか」

「もはや此上は、御法通りの御罪科を願ひ上げまする」

「其方、いや〳〵紀州の高野領に生れた百姓が、いつごろ江戸表へまゐッた、見れば六尺に近い骨太の大男、しかし眼中に一癖あるべき面相容貌、何とやら遠國の土氣は無いやうに見ゆるぞ、第一その言葉それで本國の方言か、まッすぐに申し立てい」

當時諸侯中の名物に數へられし寺社奉行の久世大和守、をりしも其日先代一周忌の供養墓參を果して丸山の菩提所より筋違橋の役屋敷へ立歸りし後、かの駈込訴人に就いて重役の下調べを聞き取りつゝ、おもはず小首を傾け眉を顰めながら、まづ其訴狀を

披き見れば、文言といひ筆蹟といひ、いかにも遠國片田舎の百姓にはあるまじきほどの美事さに、高野一山の虐政非道を書き立てゝ、二郡五十二箇村の領民が子々孫々の末代に至るまで無法の膏血を絞り取らるゝ哀訴歎願の最後に容易ならざる一箇條、天下禁制の讃岐桝を用ひて加之も其底を深くし其口を松膠に盛り上げ古糠に塗り隠せしといふ一點を見るや否、その訴狀を膝上に差押へつゝ、はッと顔色を變へて驚きぬ、たとひ訴人は疑はしき者にもせよ、もし訴狀に虚僞なくば捨て置き難き政道の一大事なりと、そのまゝ評定席の白洲に呼び入れて、みづから緣端に近く座を占めながらじろりと眼を定めて見下せば、なるほど遠國の百姓に不似合の面魂を備へし毛胸の大男、それと知りてや、摺り破りし膏藥の額も厭はず小砂礫の上に叩き埋めぬ、

「こりや、其方が高野領島野村の戸谷新右衞門と申す百姓か」

「御意に御坐りまする」

「むゝ本人とあらば、それでよし、但し訴狀の文言、いち〳〵相違ないか」

「お上へ對して、領分の民百姓が其地頭を訴へ出まするほどの義、なるべく差控へまして、實は訴狀の文言よりも猶更ら以て一層の事と御憫察を願ひ上げまする」

「むゝそれもよし、この讃岐桝云々の義に就いて、證據の品でも持參いたしたか外の事は偖置いて、こりや容易ならぬ天下御政道の禁物ぢやぞ」

「は、高野山地頭方の役僧衆も、もとより其義を存じましての要害堅固、なか〳〵私風情の力では、いかやうに苦心いたしまするとも、及びませぬ事、また萬一に取得ました上が東海道の御檢閲、函根の御關所は迚もの義と心得まして」

「それがため、證據の品は無いと申すのぢやな」

「恐れながら、元方の高野山收納所、總分方の興山寺を御取調べ、御吟味のほどを願ひ上げまする」